

阪南市埋蔵文化財報告 XXIV

貝掛遺跡 II

—86-1, 89-2・3区—

1998年

阪南市教育委員会



89-3区 土坑1 奈良三彩八曲長環（外面）



89-3区 土坑1 奈良三彩八曲長環（内面）

はしがき

大阪府の南部に位置する阪南市はこの近年、大阪のベッドタウンとして開発工事が年々増加しています。

教育委員会では、文化財保護行政の一環として、周知の埋蔵文化財包蔵地内においての様々な開発行為を事前に発掘調査し、埋蔵文化財の保存、保護に努めています。今回の調査もこうした開発工事の事前に行なったものです。

市域の中央部海岸近くに位置する貝掛遺跡からは、以前より様々な土器や石器などが採集されていました。特に関西新空港建設事業に伴う土砂採取事業のための道路建設に先立ち実施された調査では、文献で確認されていた近世期の村の存在が実証されています。このように、貝掛遺跡は縄文時代より近世期にかけての遺跡として知られています。今回の調査は、民間の開発事業に伴い実施されたものです。

ここにその報告を行います。市内の文化財を知る上で活用していただければ幸いです。

末筆ではありますが、調査にご協力下さった事業者、土地所有者ならびに関係者に感謝いたしますと同時に、今後とも文化財の保護にご理解、ご協力をお願ひいたします。

1998年3月

阪南市教育委員会

教育長 庄司菊太郎

例　言

1. 本書は、阪南市貝掛所在の貝掛遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 本調査は、下水道工事、自動車販売会社、ガソリンスタンド建設に伴い、工事の事前に実施した。
3. 調査は、阪南町（当時）教育委員会社会教育課が実施し、同課職員三好義三、同課嘱託（当時）田中早苗が担当した。
4. 本書の執筆は、第1章第1節を上野　仁、第1章第2節、第2章第1・2節、第3章を三好義三、第2章第3節を田中早苗が主に担当した。また実測図などの作成は下記の調査從事者による。
5. 本書内に示した標高は、T.P.であり、方位は既製の地形図などを使用したものと除いて磁北である。
6. 本調査における記録は、実測図面、写真、カラースライドなどに保存されている。当教育委員会にて保管しているので、広く活用されたい。
7. 調査にあたっては上記開発者をはじめ、調査地周辺の土地所有者など関係各位の理解と協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

（調査從事者）

清水恭子、井上祥子、和田旬世、井上　進、東　公美、竹口和美、森　一恵、
石原圭昭、南　憲治、谷口貴彦、松下庄一、小林克子、西畠昭男、上久保健吾、
中村淳二、外池美渡里、福森由記、射手矢由紀子、滝本奈保子、池田佳世子

一目　次一

第1章 歴史的環境

　　第1節　阪南市内の歴史的環境 1

　　第2節　貝掛遺跡周辺の歴史的環境 4

第2章 調査成果

　　第1節　86-1区 5

　　第2節　89-2区 12

　　第3節　89-3区 16

第3章　まとめ 49

第1章 歴史的環境

第1節 阪南市内の歴史的環境

阪南市は、大阪府南西部に位置する。北西部を大阪湾に接し、南東部を和泉山脈に囲まれている。和泉山脈は海浜部へ向かって延び、段丘を形成している。その間を男里川、花折川、釈迦坊川、茶屋川などが流れ、これらの河川によって平野部が形成される。遺跡は主にこれらの平野部に拡がっている。なお、現在、阪南市には約60数カ所の埋蔵文化財包蔵地が知られている。

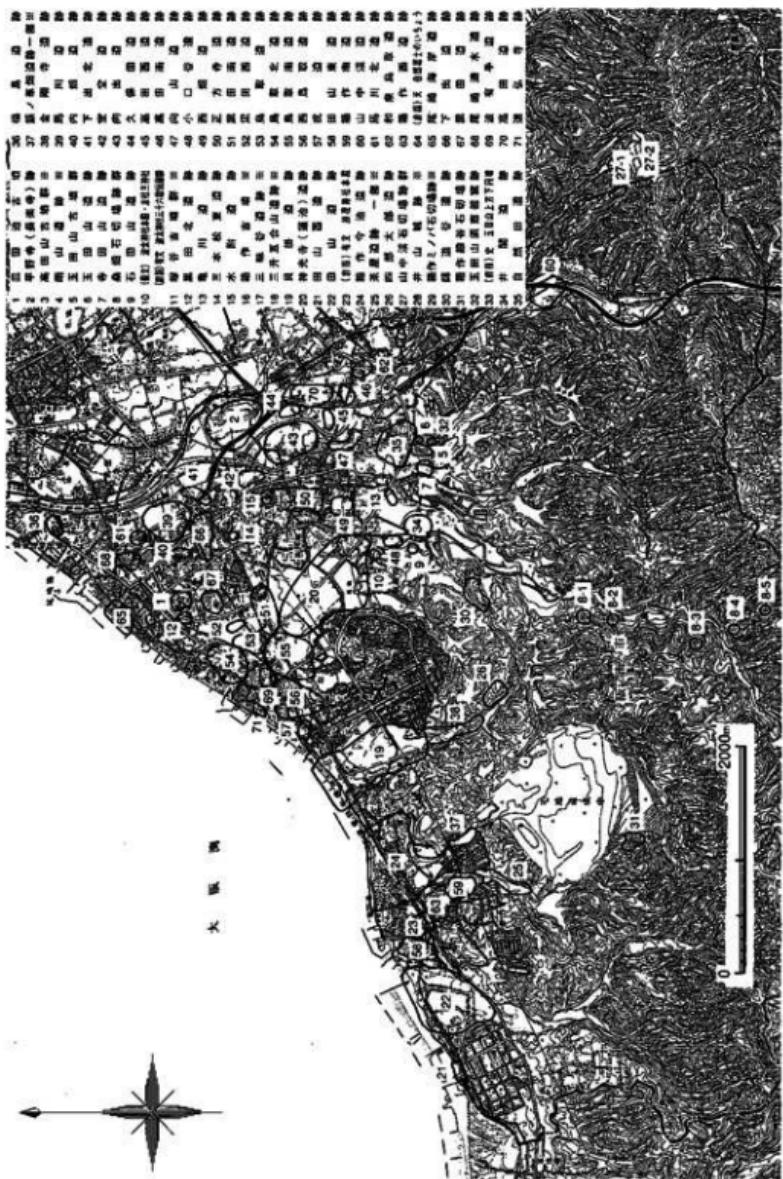
時代別に遺跡をみてみると、縄文時代では神光寺(蓮池)遺跡、向出遺跡から草創期の有茎尖頭器が採取され、向出遺跡からは後期～晚期、馬川北遺跡からは晚期の土器が出土している。また、玉田山遺跡、田山遺跡、神光寺(蓮池)遺跡からは、石鎚などの石器類が出土しているが、これに伴う遺構などは検出されていない。

弥生時代では神光寺(蓮池)遺跡から、中期の方形周溝墓が検出されており、石庵丁や同時期の土器も出土している。また、弥生式土器は鳥取南遺跡、田山遺跡、馬川遺跡、箱作今池遺跡などにおいても出土している。尾崎海岸遺跡では弥生時代末期から古墳時代初頭の塙生産の跡が発見された。

古墳時代の中期には箱作古墳が、後期には玉田山古墳群、塙谷古墳群、高田山古墳群が築造されている。玉田山1号墳からは、須恵器長頭壺、金環、銀環、琥珀製豪玉など多数の遺物が出土し、神光寺(蓮池)遺跡、田山遺跡などで同時期の遺物が確認されている。奈良時代では波有手遺跡、田山遺跡、箱作今池遺跡においても、掘立柱建物跡などの遺構群や遺物が確認され、集落の存在がうかがえる。一方、平野寺(長樂寺)跡では、平安時代末期の複弁蓮華文軒丸瓦、均整唐草文軒平瓦が採取されている。中世以降では、遺構や遺物が市内のほとんどの遺跡で確認されている。中世期の集落の存在は、ピット、瓦器などが大量に出土した下出遺跡や神光寺(蓮池)遺跡、貝掛遺跡、箱作今池遺跡で想定される。これら中世期の



第1図 阪南市位置図



第2図 阪南市埋蔵文化財分布図

集落は、現在の新興住宅地をのぞく従来からの集落とほとんど一致する。また南北朝期には、飯ノ峯川流域の山間部に山城である井山城が築かれている。この井山城は、以前より文献上でその存在が知られていたが、先年の発掘調査から、この地において国人たちの合戦が行われていたことが考古学的にも実証されることになった。近世期では、泉州特産の和泉砂岩の採掘場である箱作ミノバ石切場跡やそれに関係する集落として飯ノ峯畠遺跡が検出された。これらの近世集落は、当然のことながら、現在の集落に受け継がれている。近世集落の多くは、初期段階の史料に記載が見られることから、その源流は中世期にさかのほることになると考えられる。

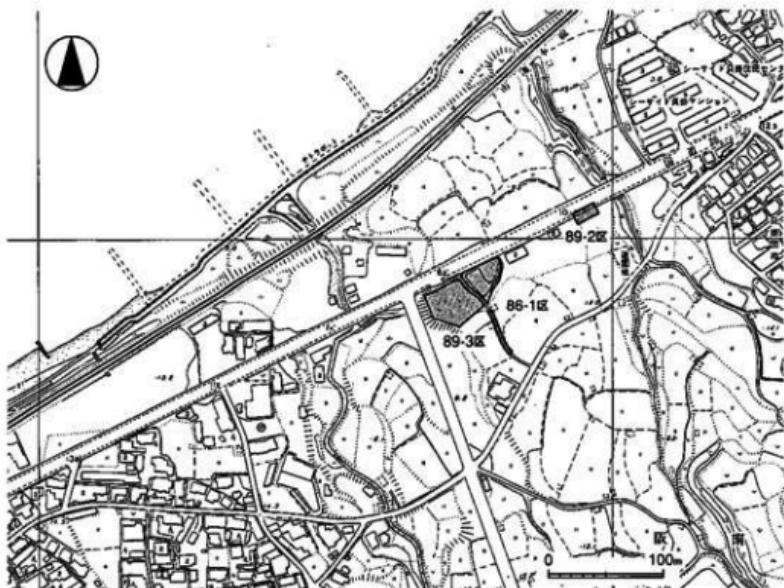
(参考)『阪南町史』上巻 阪南町 1983年

『阪南町埋蔵文化財発掘調査概要V』 阪南町教育委員会 1992年

『田山遺跡』 (財)大阪文化財センター 1983年

『井山城跡』 (財)大阪府埋蔵文化財協会 1988年

『ミノバ石切場跡』 (財)大阪府埋蔵文化財協会 1988年



第3図 調査区位置図

第2節 貝掛遺跡周辺の歴史的環境

貝掛遺跡は阪南市の中央海岸部で、釈迦坊川、花折川が形成する谷に拡がる。以前より河口付近において、各種の土器や石器などが採取されていたことからこの付近のみが貝掛遺跡として周知されていた。

しかし、1985年に関西新空港建設事業に伴う土砂採取事業に先立つ（財）大阪府埋蔵文化財協会の分布調査が行われ、谷のほぼ全域にわたり遺物の散布があり、遺跡の範囲が拡がっている可能性が高いことが確認された⁽¹⁾。

分布調査に基づいて、（財）大阪府埋蔵文化財協会が1987年に実施した調査では、近世期の建物跡が確認され、文献や絵図などに記載されていた同時期の集落「舞村」の存在が裏付けられた⁽²⁾。

さらに上流では、平安時代末期から鎌倉時代前期ごろの寺院跡をはじめとする金剛寺遺跡の調査が行われた⁽³⁾。

一方、河口より約900m上方には塚谷古墳群が所在しており、1970年代に大阪府教育委員会により発掘調査が実施されている。この調査では、横穴式石室を主体部とする円墳2基が確認された。築造年代は6世紀末～7世紀初め頃と推定される⁽⁴⁾。現在は1号墳のみが移築されている。

今回報告を行う調査区は、いずれも釈迦坊川の右岸段丘上に位置し、上述した石器、土器などが採取された地域にあたる。

また、今回の89-2区の北部に位置する調査では、平安時代から中世期の溝などが検出されたが、直接集落の存在に結びつくようなものは、確認されなかった⁽⁵⁾。

註

(1) (財) 大阪府埋蔵文化財協会 「阪南町内埋蔵文化財」 1985年

(2) 同 「貝掛遺跡発掘調査報告書」 1988年

(3) 同 「金剛寺遺跡発掘調査報告書」 1987年

(4) 西山要一 「淡輪磯山古墳群」(磯山古墳群調査会) 1980年

(5) 阪南市教育委員会 「貝掛遺跡-90-1区-」 1992年

第2章 調査の成果

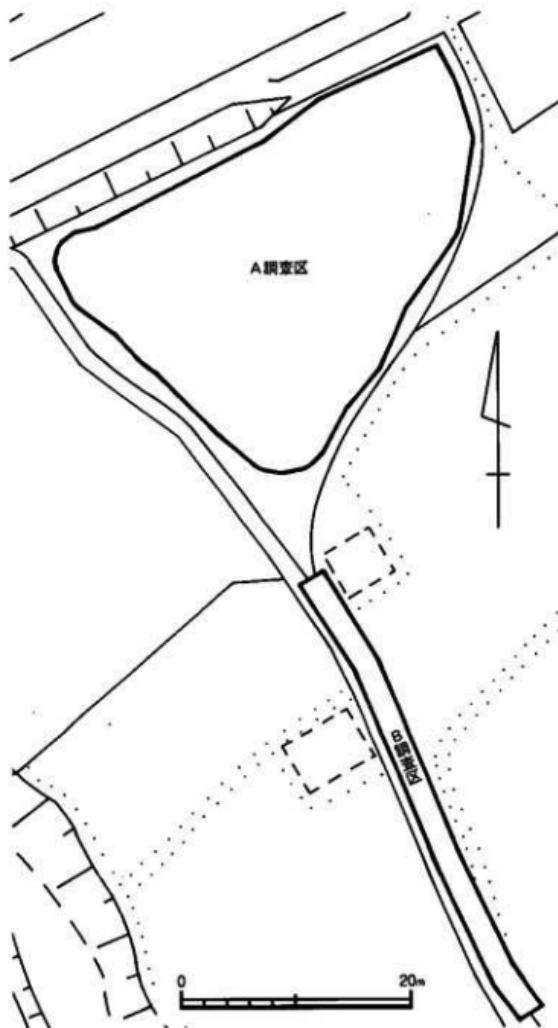
第1節 86-1区

1. 調査の概要

(第4図)

調査区は駿河坊川の右岸段丘上に位置し、以前より地元の郷土史家によって遺物の散布が確認されていた。現在の国道26号線に面している。この国道に面した部分をA調査区とし、南側の既設の水路改修工事部分をB調査区とした。A調査区の調査は、バックホウにより耕作土などを除去したのち遺構確認などの作業を人力にて行い実施した。B調査区は立会い調査とした。

A調査区の人力掘削がはじまって数日経過後の夜間、届出者からこの調査の掘削工事などを請け負っていた民間土木業者が、何者かの指示によりバック



第4図 86-1区 調査区位置図

ホウを調査区内に乗り入れ、遺構面のほとんどを掘削破壊するという実に信じられない行為があった。このため、以下に記すように、遺構は数条の溝と若干のピットを検出したにとどまり、遺物についても掘削破壊され、山積みされた土の中から層位、位置が不明のまま出土したものが大勢を占めている。

2. 基本層序（第5図）

耕作土以下の基本的な層序は、第2層褐色シルト、第3層灰褐色土、第4層灰褐色シルト、第5層暗灰褐色土の順で、第6層黄色粘土が地山である。

3. 遺構（第5図）

上述したように不当な掘削行為により、遺構のほとんどが破壊され、溝を3条と数十のピットを検出したにすぎなかった。以下、溝についてのみ記載する。ピットについては、建物などとの関連性を確実にできなかつたため省略する。

溝1

幅約55cm、長さ約3.5m、検出面からの深さ約8cmを呈し、南東—北西方向に流れる。

溝2

幅約60cm、長さ約10.2m、検出面からの深さ約10cmを呈し、南西—北東方向に流れる。以下に示す瓦器ほか、須恵器などが出土した。

溝3

幅約60cm、長さ約6m、検出面からの深さ約8cmを呈し、南西—北東方向に流れる。溝2と並行している。

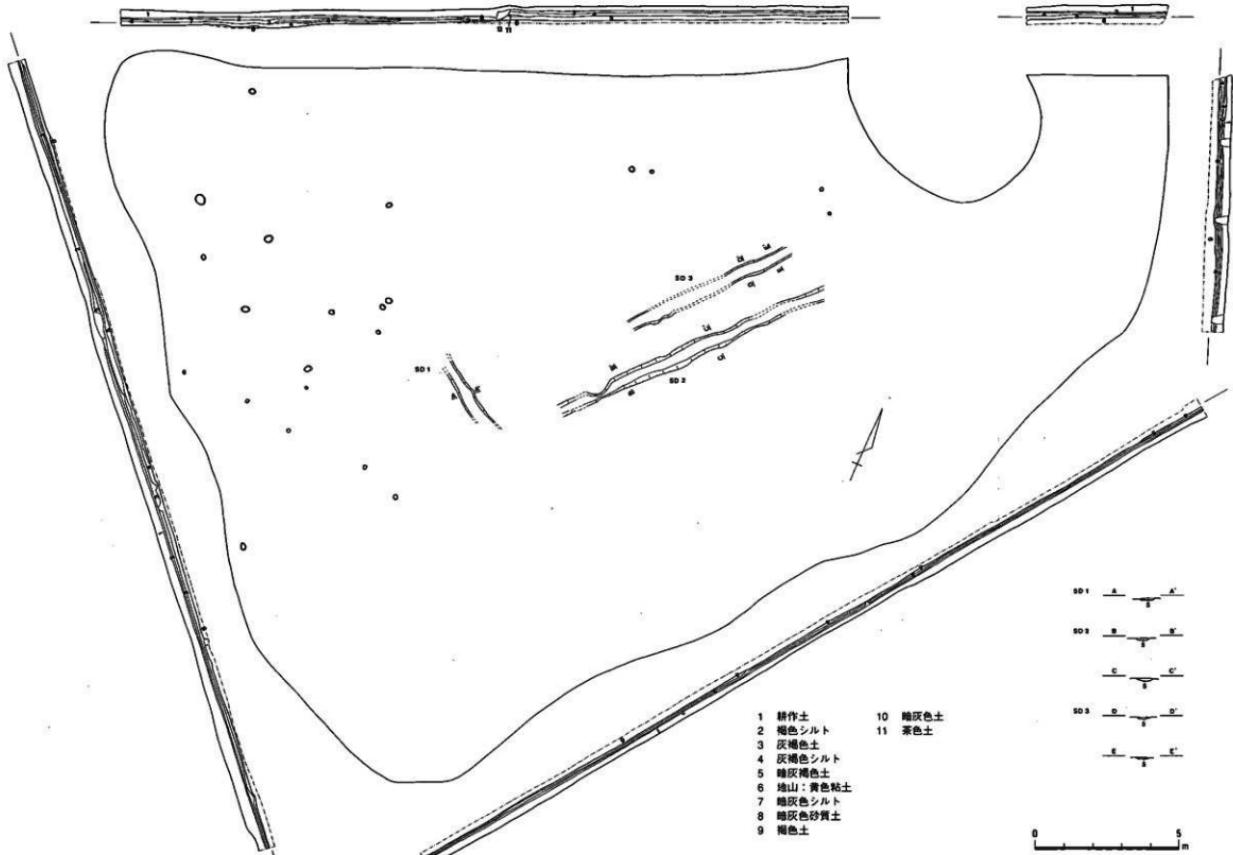
4. 遺物（第6・7図）

上述したように、破壊行為を受けたため、遺物についても出土層位すら不明なものがほとんどである。掲載している遺物の大半は、破壊掘削を受けて積み上げられた包含層の中から採取されたものである。

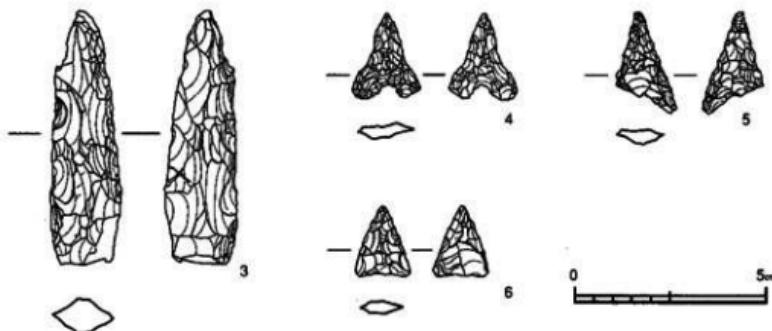
このような理由により、遺構から出土した遺物で図化し得たものは2点のみであった。1は瓦器塊口縁部、2は瓦器皿で、いずれも溝2から出土した。

以下はA調査区の包含層もしくはB調査区からの出土である。





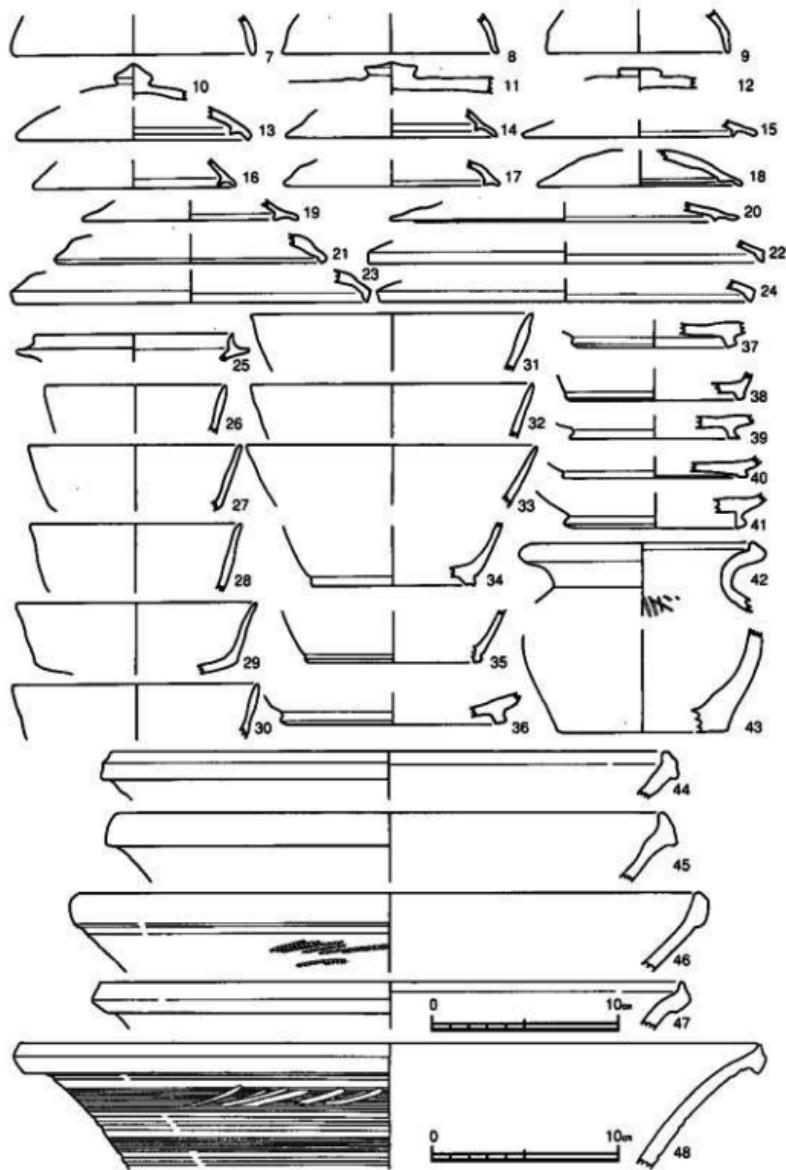
第5図 86-1区 調査区 平面・断面図



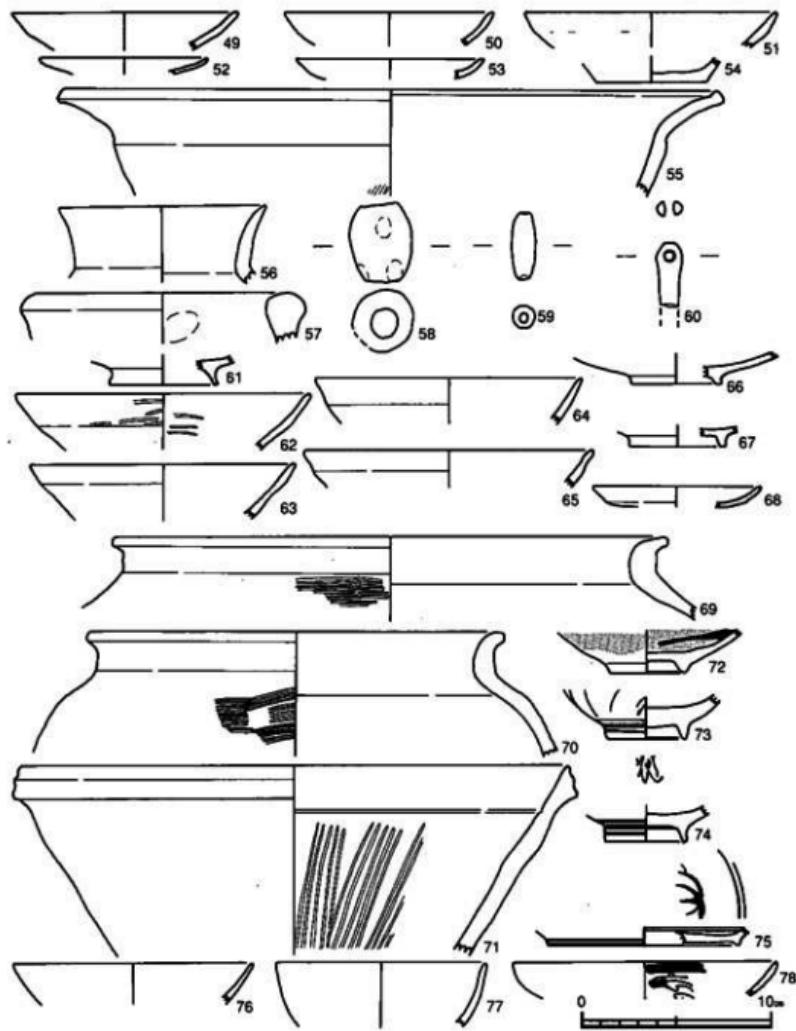
第7図 86-1区 出土遺物

3～6は石器で、すべてサヌカイト製。3は石槍。基部は欠損している。4～6は石鎌。5は一部欠損している。いずれも縄文時代のものである。この他にも、サヌカイトの剥片が出土している。7～24はいずれも須恵器坏蓋。25～40は同じく坏身。41も坏身の高台部と思われるが、壺の可能性もある。42は須恵質土器の壺口縁部。43は同じく壺底部。44・45は東播系須恵質土器の捏鉢。46～48は須恵器壺の口縁部。49～54は土師質土器の塊もしくは皿の口縁部または底部。55は土師質土器のナベ口縁部。56は土師質土器の壺の口縁部。57は土師質壺。58～60は土師質の土錘で、前2者は管状のもので、残1者は有孔のもの。61は黒色土器の高台部。62～68は瓦器の塊または皿。69・70は瓦質の壺の口縁部。71は陶器のすり鉢。72は陶器の塊の高台部。73～78は磁器である。

上記のうち、25・71～73・75・77はB調査区からの出土である。また、45・46・48・66・69・70は第3層から出土した。



第8図 86-1区 出土遺物



第9図 86-1区 出土遺物

第2節 89-2区

1. 調査の概要（第10図）

調査区は糸迦坊川と花折川にはさまれた段丘上に位置する。前述の86-1区の東側にあたる。遺構の有無や遺物包含層の厚さなどを確認するための一次調査を実施したところ、遺物包含層は存在せず、盛土の直下が地山であったが、以下に記す流路の端部が検出された。このため、二次調査を行った。流路内からは須恵器、土師質土器、瓦器、瓦質土器などが出土した。

2. 基本層序（第11図）

上述したように、盛土の直下が明黄灰白色粘土の地山である。

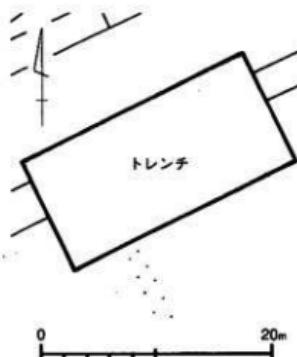
3. 遺構（第11図）

流路

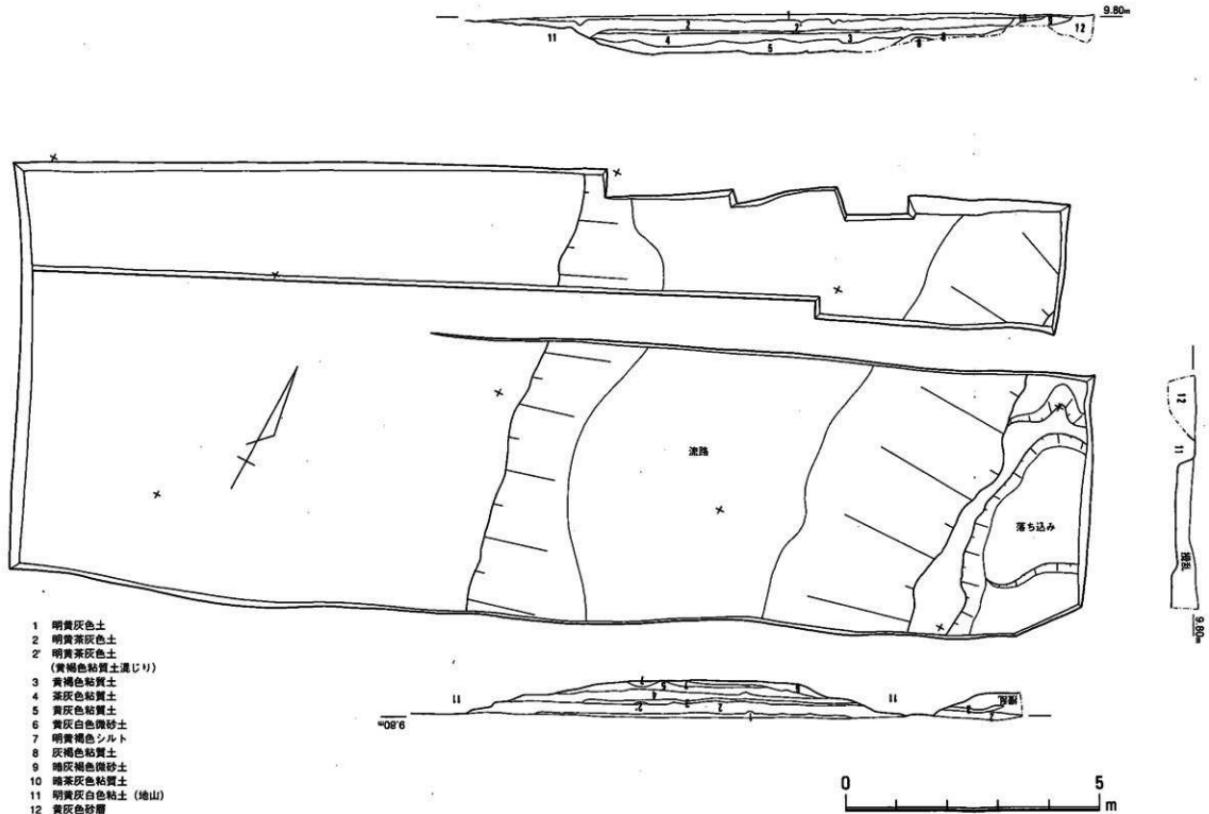
調査区内を南北に流れる。南に高く、北に低い現在の自然地形と合致している。幅約9m、検出面からの深さ約75cmを測る。最下層（第6層）および第5層からは遺物は出土しなかったが、その直上の第4層からは瓦器、土師質蜻蛉、瓦質土器などが、その上層の第2層からは陶器類が出土している。これらのことから中世期中頃には存在し、中世期末～近世期初めには埋没していたと考えられる。

4. 遺物（第12図）

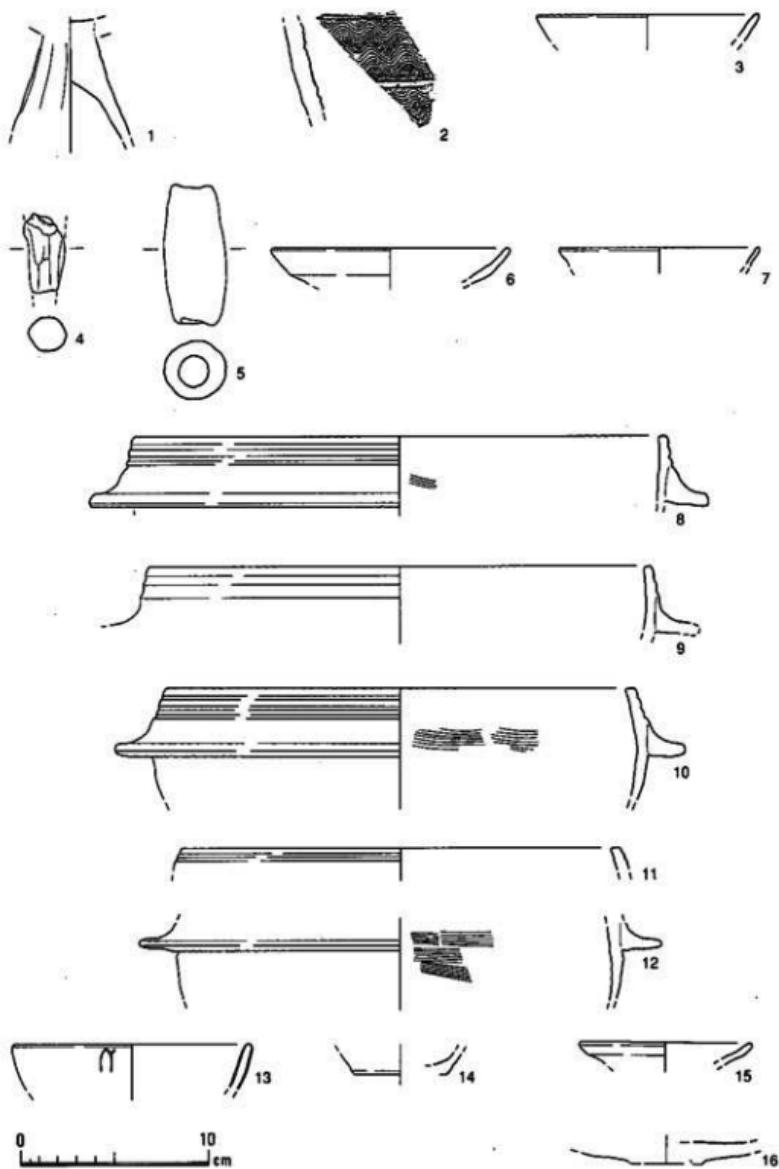
遺物包含層が存在しなかったことから、遺物のはほとんどは流路内からの出土である。1は土師器高坏の脚部で、かなり摩耗している。2は須恵器で器台もしくは甕と思われる。3は須恵器坏の口縁部。4は土師質土器の土製品。5は土師質土錘で比較的大型のものである。6・7は瓦器塊。8～12は瓦質羽釜。13は青磁蓮弁碗。14～16は陶器で、14は天目茶壺の底部。3点とも瀬戸美濃産と思われる。



第10図 89-2区 調査区位置図



第11図 89-2区 平面・断面図



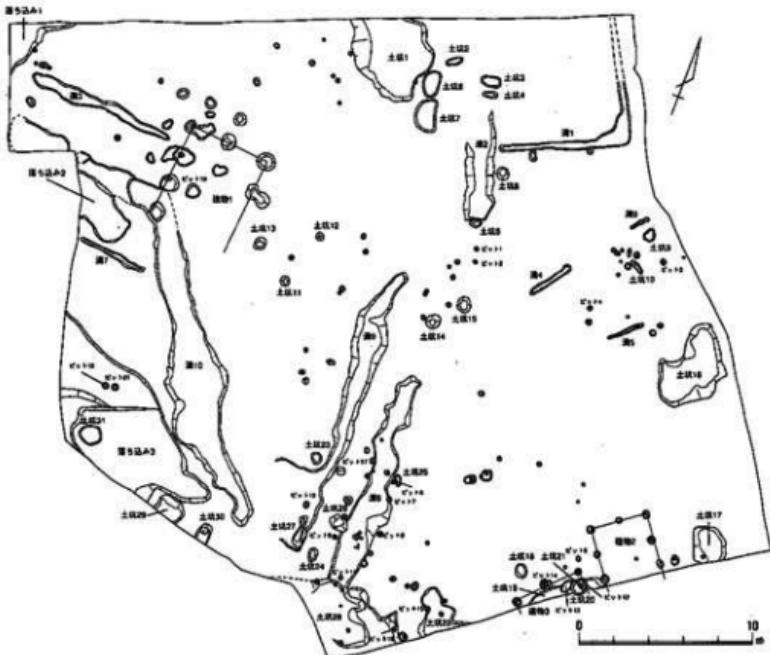
第12図 89-2区 出土遺物

第3節 89—3区

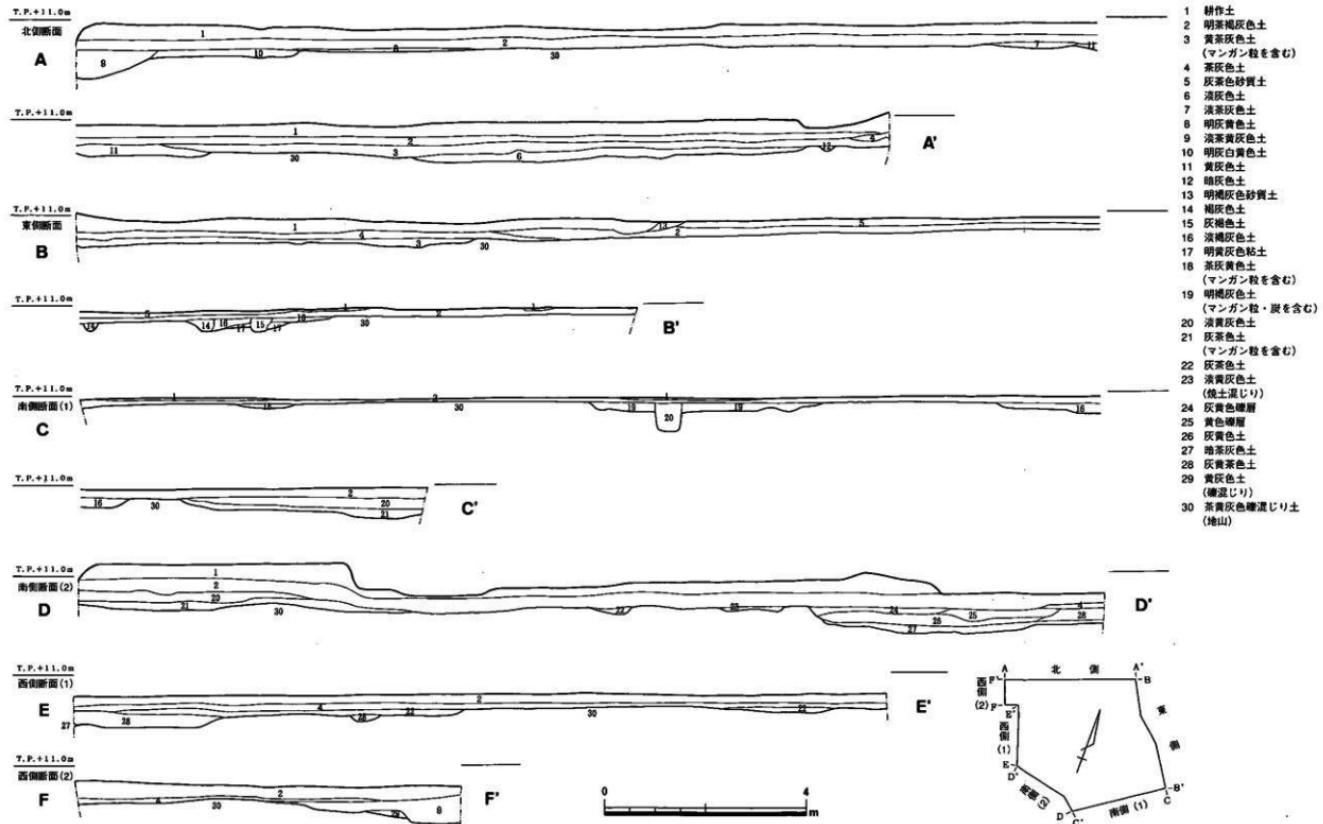
1. 基本層序

当遺跡の調査時の現地表面の標高はT.P.+11m前後で、現況は水田であった。地表面は東から西へ緩やかに下降し、その差は約60cmである。

基本層序は、耕作土、明茶褐灰色土層、地山である。調査区の西半部は明茶褐灰色土層と地山の間に茶灰色土層が、東北部では茶灰色土層と地山の間に黄茶灰色土層が、東部では耕作土と明茶褐灰色土層の間に灰茶色砂質土層がみられた。



第13図 89-3区 平面図



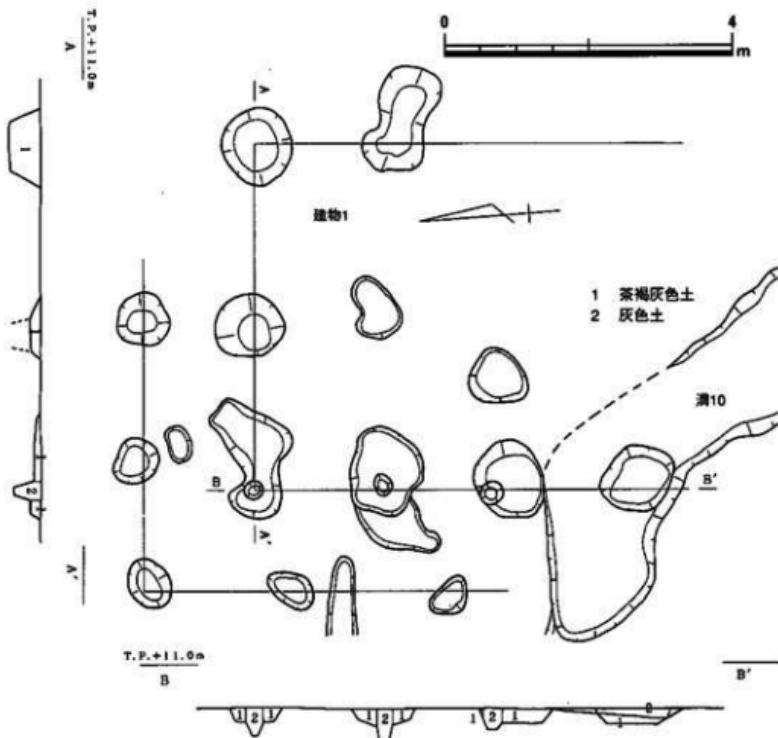
第14図 89-3区 断面図

2. 遺構と遺物

建物1（第15図）

調査区の西に位置する7世紀前半と思われる掘立柱建物である。南部は後世の搅乱によって検出できなかったが、2間×3間以上の庇が付く建物と思われる。主軸方向はN-4°-Wで、柱の掘形は径約80cm~1.0m。深さ約10~45cmで柱間距離は約1.7mを測る。3ヵ所で直径30cm前後の柱痕が観察された。埋土は茶褐色土である。

遺物で図示できるものはなかったが、サヌカイト剥片、土師器片、須恵器の壺体部とかえりのある坏蓋の口縁部が1点出土した。

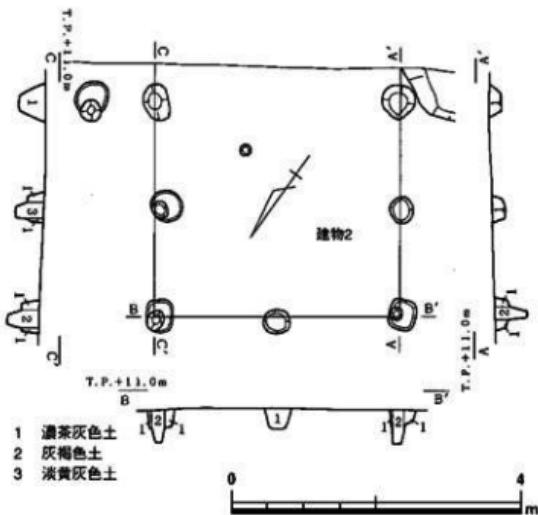


第15図 89-3区 建物1 平面・断面図

建物2（第16図）

調査区の南東部に位置する掘立柱建物である。2間×2間以上で、柱間距離は約1.5mを測る。柱の堀形は直径約40cmの円形で、深さ約20~45cmを測り、埋土は濃茶灰色土。内3カ所に直径20cm前後の柱痕が観察された。主軸方向はN-36°-E。

出土遺物は器種、時期不明の土師器片と須恵器の飯蛸壺である。いずれも細片のため、図示できるものはなかった。



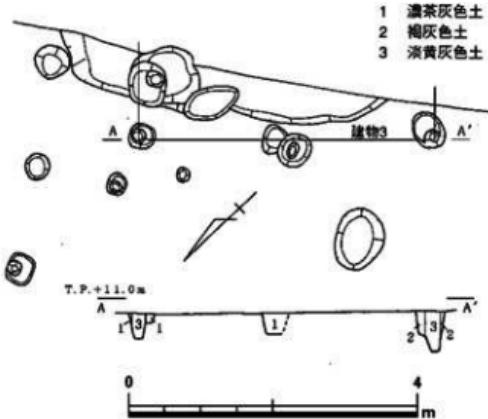
第16図 89-3区 建物2 平面・断面図

建物3（第17図）

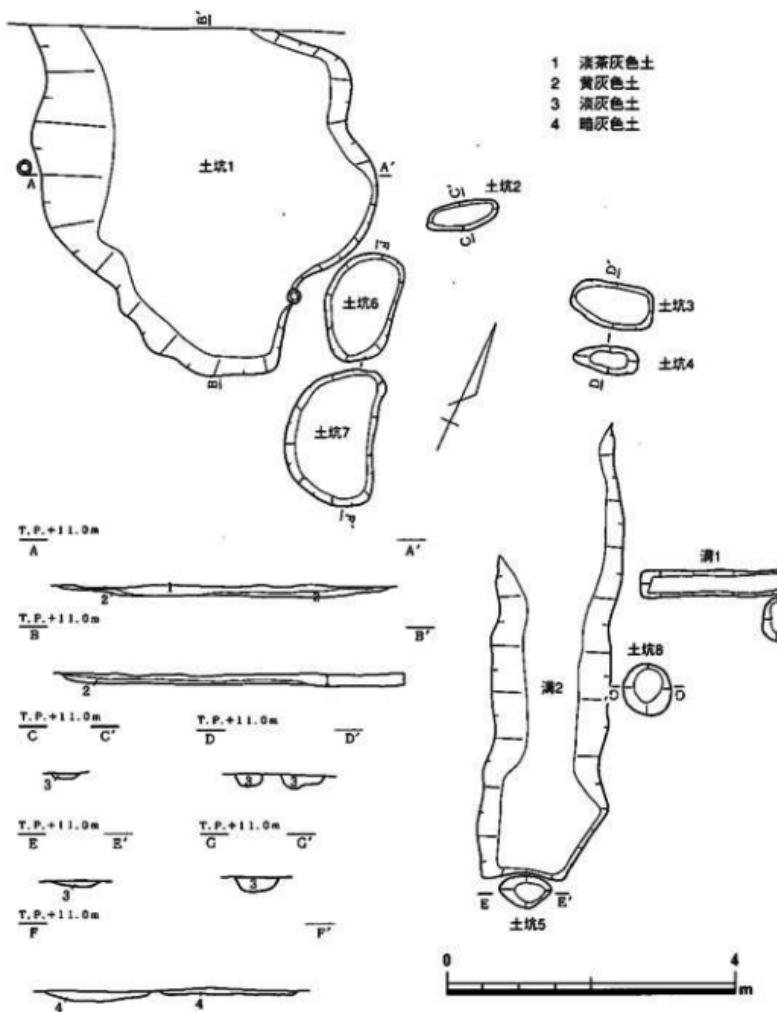
建物2の西側で検出した3個の柱穴である。東西2間で南北に延びる掘立柱建物である。柱間距離は約2.0m、柱の堀形は直径約40cmの円形で、深さ約15~55cmを測る。2カ所で直径20cm前後の柱痕が観察された。

サヌカイト剥片と土師器壺体部が出土した。

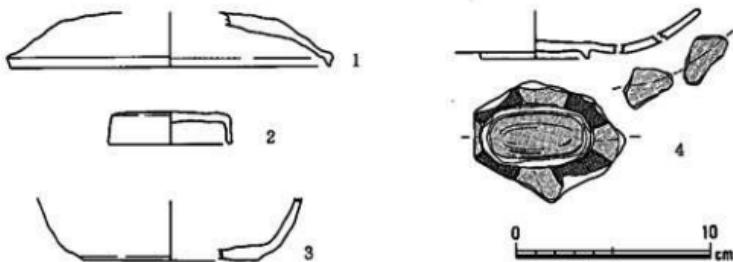
1. 濃茶灰色土
2. 灰褐色土
3. 淡黄灰色土



第17図 89-3区 建物3 平面・断面図



第18図 89-3区 土坑1・2・3・4・5・6・7・8 平面・断面図



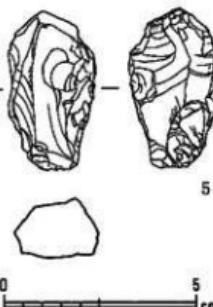
第19図 89-3区 土坑1 出土遺物

土坑1（第18・19図）

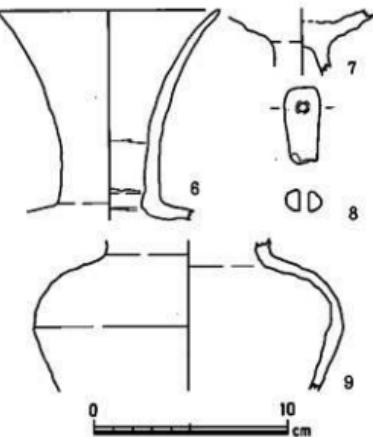
8世紀前半の不定形土坑である。調査区内で最も大きく、一部は調査区外に延びる。長さ約4.8m以上、幅約4.6m、深さ約10cmを測る。埋土は2層に分かれ、底部は平坦な皿状を呈する。

出土遺物は土師器、須恵器、三彩陶器である。土師器は壺の体部片で、外面に縦方向のハケ目、内面は不定方向のハケ目とヘラ削りを施すものの2種類である。須恵器は壺蓋2点、壺身2点の合計4個体分である。1はつまみの付く壺蓋である。2は壺蓋で、つまみはつかない。

3は高台のない壺身で、図示できなかつたもう1点の壺身も3と同じ形のものである。4は奈良三彩の八曲長壺である。楕円形の高台が付く底部にあたる破片と稜のある花弁部、口縁端部の3片が出土した。底部は高台に接合痕がみられないことから、型作りと考えられる。花弁の外面は、1枚ずつ薄い緑色と褐色の釉で交互に塗り分けられている。内面は緑色の釉がみられるが、剥落が激しく詳細は不明である。この器種としては金属製のものが正倉院で知られているが、三彩で



第20図 89-3区
土坑2 出土遺物



第21図 89-3区 土坑4・11 出土遺物

の出土例はない。

土坑2・3・4・5（第18・20・21図）

北から土坑2・3・4、溝2をはさんで土坑5が並ぶ。埋土はいずれも溝2と同じ淡灰色土であることから、上部を削平された溝2の深部と推定される。

5はサスカイトの楔形石器で、土坑2から出土した。長さ4.1cm、幅2.3cm、厚さ1.55cmである。6・7は土坑4から出土した須恵器である。6は長頸壺の口頭部、7は高坏である。土坑3から土師器、土坑5からも土師器、須恵器片が出土している。

土坑6（第18図）

長径約1.5m、短径約1.0m、深さ約12cmを測る。底部は平坦な皿状を呈する、浅い楕円形土坑である。

遺物は出土しなかった。

土坑7（第18図）

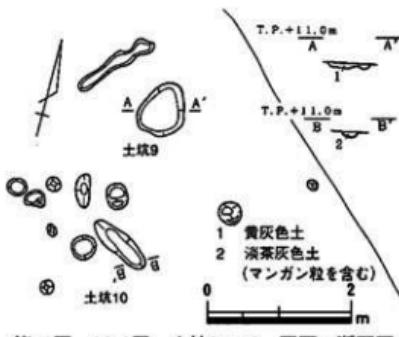
長径約3.9m、短径約1.2m、深さ約10cmを測る楕円形土坑である。北側に隣接する土坑6と幅、深さが似ていることから同一の造構であったことも考えられる。

土師器が出土したが、細片のため器種、時期は不明である。

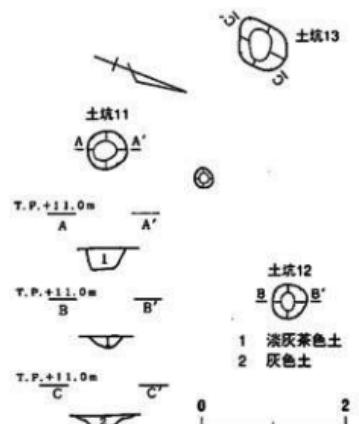
土坑8（第18図）

直径約70cm、深さ約20cmを測る円形土坑である。底部は鍋底状を呈する。

遺物は出土しなかった。



第22図 89-3区 土坑9・10 平面・断面図



第23図 89-3区 土坑11・12・13
平面・断面図

土坑9（第22図）

長径約80cm、短径約60cm、深さ約6cmを測る梢円形土坑で、遺物は出土しなかった。

土坑10（第22図）

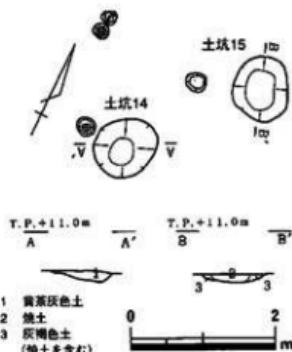
長径約80cm以上、短径約30cm、深さ約9cmを測る細長い土坑で、鑿溝の一部と推定される。

遺物は出土しなかった。

土坑11（第21・23図）

直径約50cm、深さ約16cmを測る円形土坑である。

8は3点出土した土師質有孔土錘の内の1点で、9は須恵器の短頸壺である。



第24図 89-3区 土坑14・15
平面・断面図

土坑12（第23図）

直径約50cm、深さ約8cmを測る円形土坑である。

遺物は出土しなかった。



土坑13（第23図）

長径約80cm、短径約60cm、深さは約18cmを測る円形に近い土坑である。

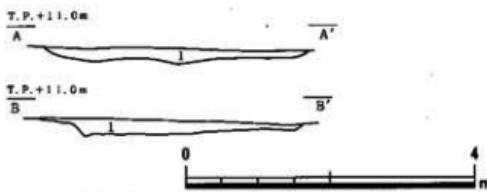
土師器、須恵器片が出土したが図示できなかった。



土坑14（第24図）

直径約80cmの円形土坑で、深さ約15cmを測る。

須恵器の壺体部が出土した。

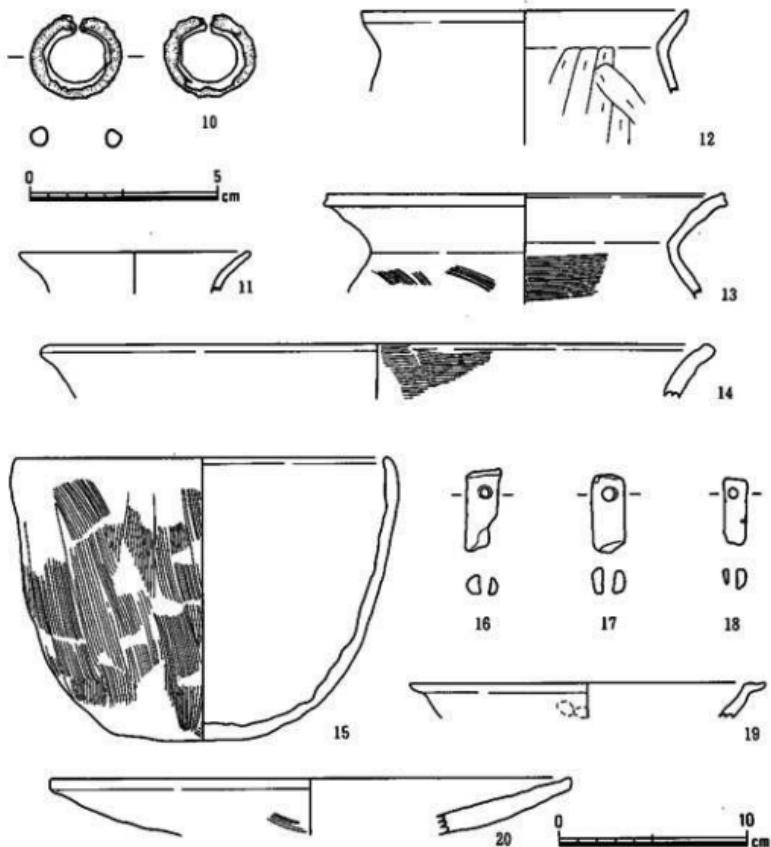


第25図 89-3区 土坑16 平面・断面図

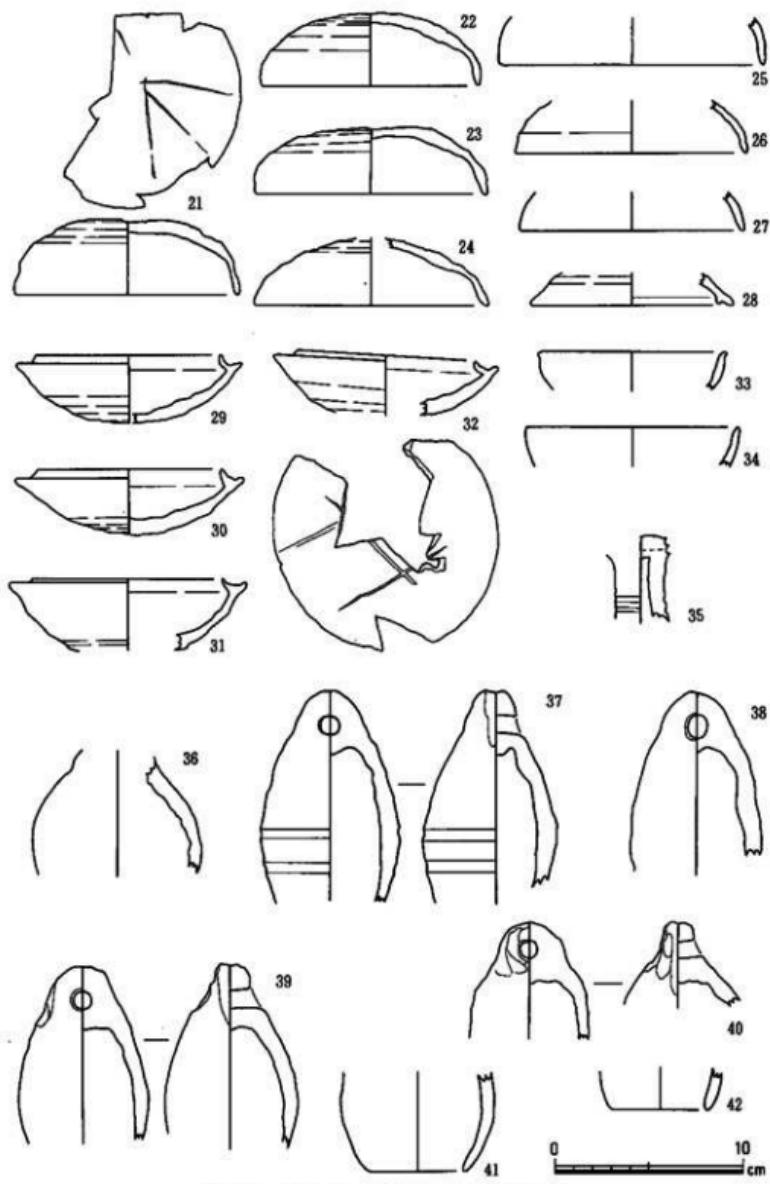
土坑15（第24図）

土坑14の北東に位置する直径約80cm、深さ約10cmを測る円形土坑。埋土は上層の焼土と下層の焼土を含む灰褐色土に分かれる。

土師器片が出土したが、細片のため器種、時期は不明である。



第26図 89-3区 土坑16 出土遺物 (1)



第27図 89-3区 土坑16 出土遺物 (2)

土坑16（第25～27図）

調査区の西部に位置する7世紀前半の不定形土坑である。長径約5.2m、短径約2.5m、深さは最深部で約50cmを測る。底部は皿状だが、細かい凹凸がかなり見られる。

遺物は耳環、土師器、須恵器、鉱滓が出土した。10は上面から出土した金銅製の耳環である。直径約2.5cm、断面径0.4cmで、銀色に近い。11～20は土師器、21～42は須恵器である。11～14は壺の口頭部である。15は鉢型の製塙土器で二次焼成をうけており、器壁は荒れている。16～18は土師質有孔土錐、19は皿の口縁部である。20は大型の高壺口縁部と思われる。21～27はつまみやかえりのない壺蓋で、28はかえりのある壺蓋である。29～32は21～27の壺蓋と組み合わされる受部のある壺身、33・34は28と合う、受部のない壺身である。そのうち21・32および図示できなかった壺身底部片の3点にはヘラ記号がみられた。35は高壺の脚部片、36～42は飯蛸壺である。

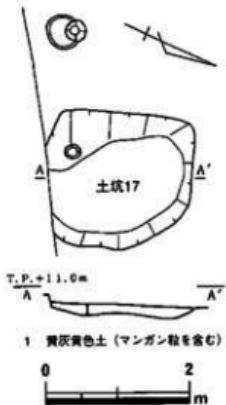
土坑17（第28・29図）

一辺約2.0mの方形に近い土坑で、一部は調査区外に延び、深さ約16cmを測る。

43はサヌカイトの削器で、長さ4.0cm、幅3.0cm、厚さ0.9cmである。その他に土師器壺の口縁部、須恵器片が出土している。

土坑18（第30図）

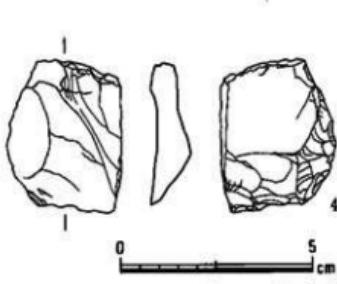
長径約90cm、短径約70cm、深さ約15cmを測る円形土坑で、7世紀の土師器の壺口縁部が出土した。



第28図 89-3区 土坑17
平面・断面図

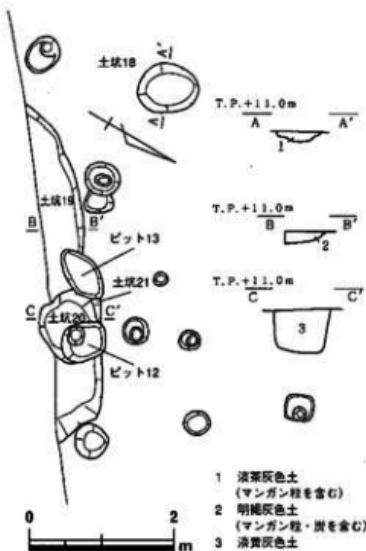
土坑19（第30・32図）

一画のみが調査区で検出され、大部分は調査区外にある。



第29図 89-3区 土坑17 出土遺物

長径約5.1m以上、
短径約70cm以上、
深さは約20cm以
上を測る。土坑
20・21、ピット
12・13に切られ
ている。



第30図 89-3区 土坑18・19・20・21
平面・断面図



第31図 89-3区 土坑22
平面・断面図

44は土師器の壊で7世紀頃のものと思われる。

土坑20（第30・32図）

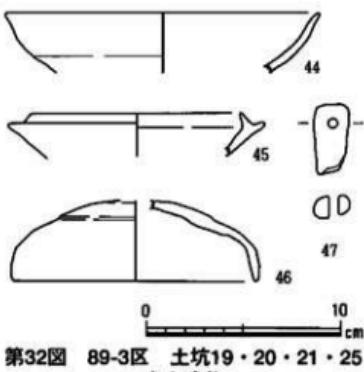
直径約1.0mのほぼ円形土坑で、深さ約60cmを測る。

45は須恵器の壊身で7世紀前半のものである。その他に図示できなかったが、土師器の甕口縁部が出土した。

土坑21（第30・32図）

北側の肩の一部が僅かに残る遺構で、規模、深さとともに不明である。ピット12・13、土坑20より古く、土坑19より新しい。

出土遺物は46は須恵器の壊蓋で7世紀前半のものである。



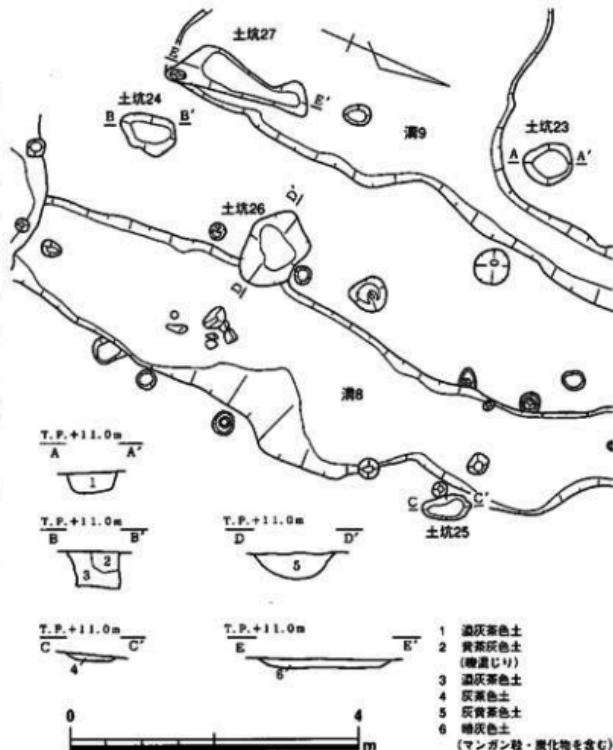
第32図 89-3区 土坑19・20・21・25
出土遺物

土坑22

(第31図)

調査区の南壁にかかるて検出された不定形土坑で、調査区外ではさらに拡がるものと思われる。ピット15・20に切られている。長径約2.6m、短径約1.0m、深さは最深部で約20cmを測る。

遺物は出土しなかった。



土坑23

(第33図)

長径約70cm、短径約60cm、深さ約30cmを測る、円形に近い土坑で、土師器の壺体部が出土した。

第33図 89-3区 土坑23・24・25・26・27 平面・断面図

土坑24 (第33図)

長径約80cm、短径約50cm、深さ約50cmを測る、楕円形の土坑で、遺物は出土しなかった。

土坑25 (第32・33図)

長径約70cm、短径約40cm、深さは約4cmを測る。楕円形の浅い土坑、出土遺物には土師器の壺体部と47の土師質有孔土錐がある。

土坑26（第33図）

溝8より新しい土坑で、長径約1.2m、短径約80cm、深さ約40cmを測り、鍋底状を呈する。

遺物は出土しなかった。

土坑27（第33図）

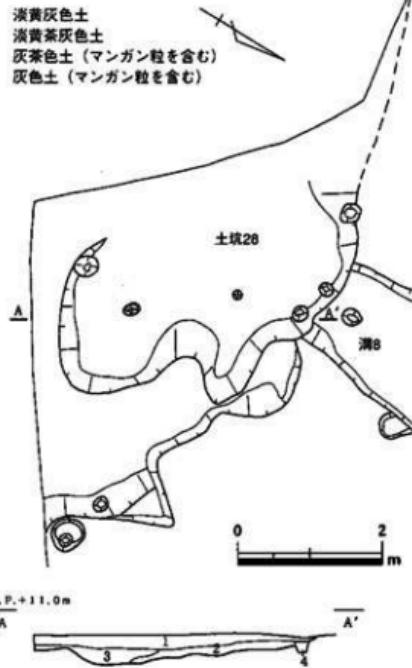
長径約80cm、短径約10cm、深さ約20cmを測る細長い土坑である。埋土に炭化物を多く含んでいる。

遺物は出土しなかった。

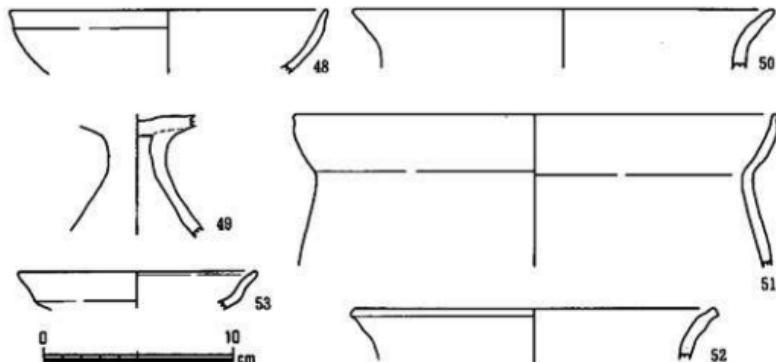
土坑28（第34～36図）

調査区の南端に位置し、溝8と重複して検出された。一部は調査区外に拡がるために全体の規模は不明であるが、最深部で40cmを測る。

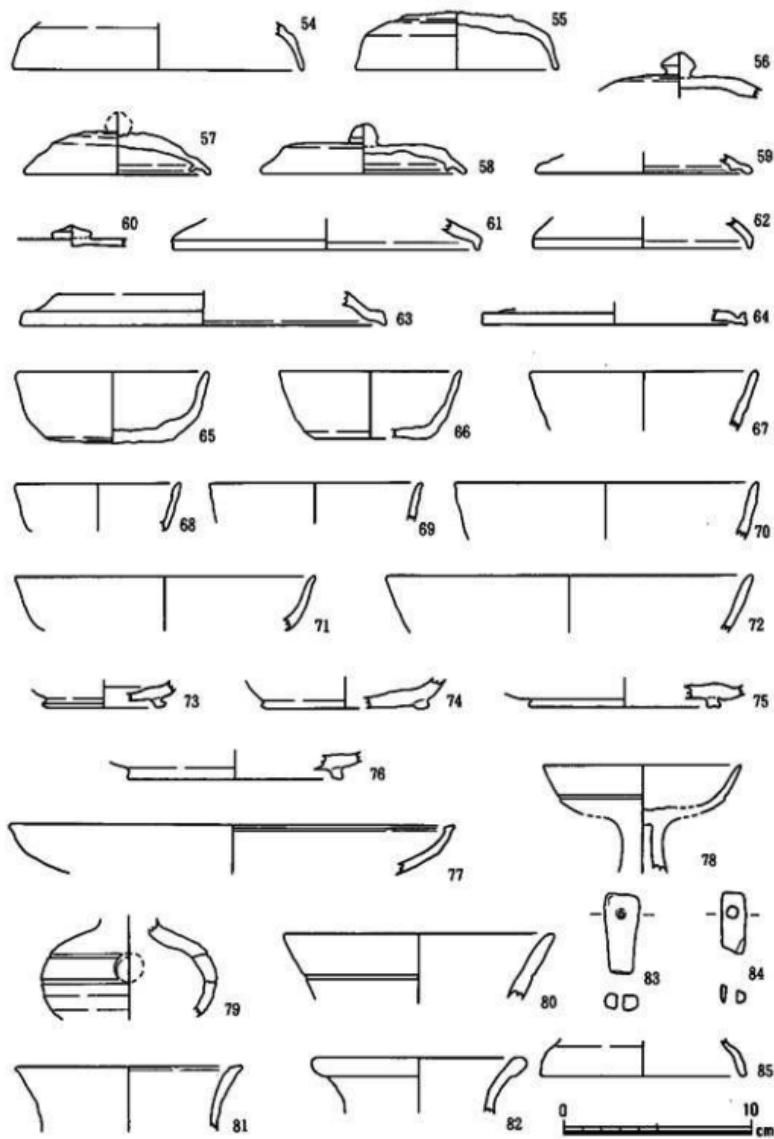
サヌカイト剥片、土師器、須恵器、瓦器が出土した。48～53は土師器で、48・53は壺口縁部、49は高壺脚部、



第34図 89-3区 土坑28 平面・断面図



第35図 89-3区 土坑28 出土遺物 (1)



第36図 89-3区 土坑28(2)・30 出土遺物

50~52は壺の口縁部である。その他に図示できなかったが、壺体部や砲弾形を呈すると思われる製塩土器片もみられた。54~82は須恵器である。54~64は壊蓋で、54・55はつまみやかえりのつかないもの。56~59は宝珠つまみをもち、内側にかえりのあるもの。60~64は擬宝珠や扁平なつまみをもち、かえりのないものである。65~76は壊身で、65・66は底部に高台のないもの。73~76は高台のあるものである。77は皿の口縁部と思われる。78は7世紀前半の無蓋高壺だが脚部を欠く。79は口頭部を欠く甌である。80~82は壺の口縁部と思われる。上記の他に須恵器では壺体部、長頸壺の頸部、平瓶の頸部などが出た。83・84は土師質有孔土錘である。

土坑29（第37図）

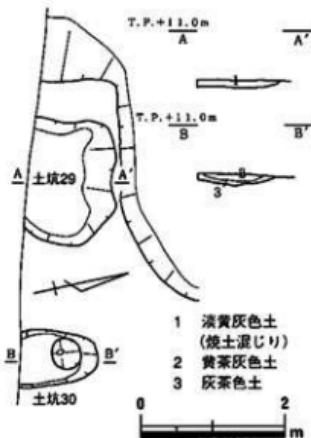
調査区の南壁にかかって検出された。全長は1.5m以上、幅約1.2mを測る橢円形と推定される土坑である。深さは約10cmで、底部は平坦である。

土師器の破片が出土したが、器種、時期は不明である。

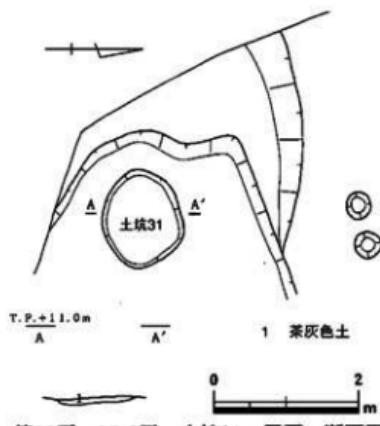
土坑30（第37図）

土坑29の東側に位置し、同じく南壁にかかって検出された。全長は1.1m以上、幅約90cm、深さは最深部で約20cmを測る。

85は須恵器の高壊脚部である。



第37図 89-3区 土坑29・30
平面・断面図



第38図 89-3区 土坑31 平面・断面図

土坑31（第38図）

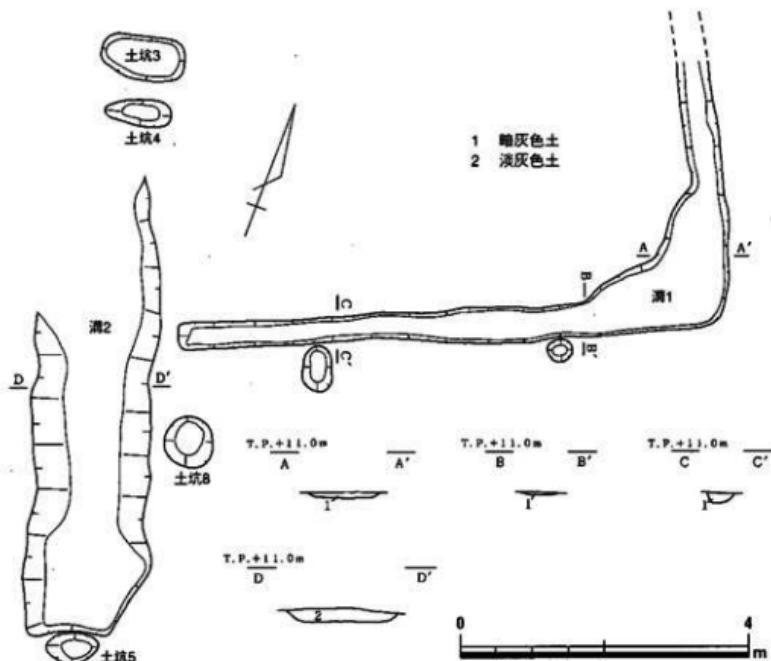
落ち込み3の埋土を除去後、底部から検出された。直径約50cm、深さ約10cmを測る円形の土坑である。

遺物は出土しなかった。

溝1（第39・40図）

溝2と重複するL字形の溝で、検出長約9.9m、幅は約50cmだが、曲部は広く約1.2m、深さ約4～12cmを測る。溝底は東高西低。北部上面は大部分が削平されているが、北端は調査区外に延びていると思われる。

86は土師器の壊、87は須恵器でかえりのある壊身、88は須恵器長頸壺の頸部である。図示できなかったが須恵器壺体部、中世の土師質罐もみられた。

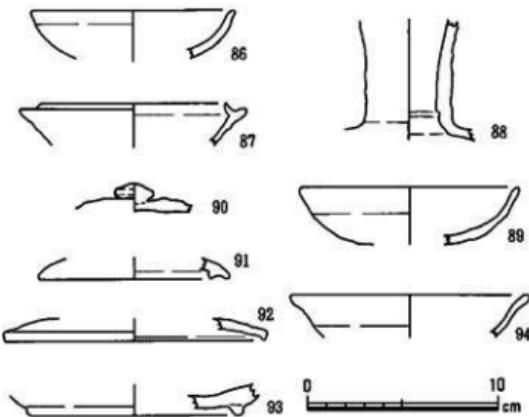


第39図 89-3区 溝1・2 平面・断面図

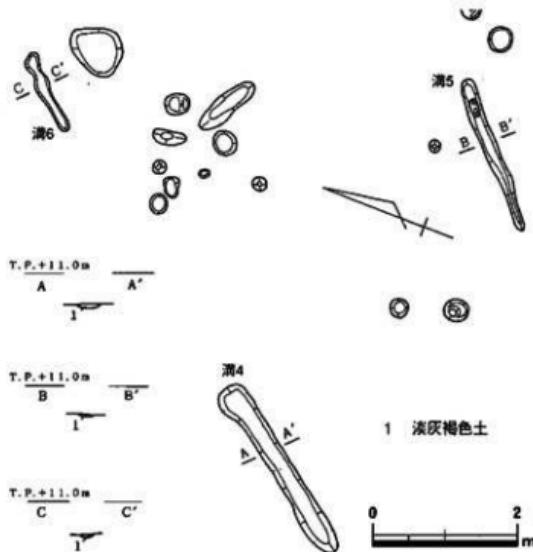
溝2（第39・40図）

溝1より古い溝で、検出長約6.4m、幅は約1.6~1.8m、深さ約18cmを測る。北部は溝1と同じく削平されている。周辺の土坑2・3・4・5と埋土が同じことから、この溝の深部と考えられ、上部はかなり削平を受けているものと思われる。さらに調査区外を北部に延びていたものと推定される。

出土遺物には土師器、須恵器と瓦器があり、89は土師器の壺、90~92は須恵器の壺蓋、93は須恵器の壺身、94は瓦器壠である。その他に土師器の竈体部や土師質靖壺、須恵器の壺体部がみられる。



第40図 89-3区 溝1・2 出土遺物



第41図 89-3区 溝4・5・6 平面・断面図

溝3（第42図）

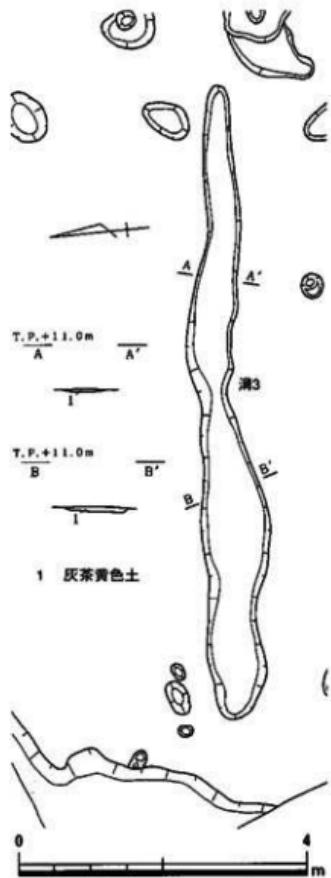
調査区の西部に位置する。検出長約8.8m、幅約40cm～1.0m、深さ約6cmの浅い東西溝である。溝底は東高西低で、西方向に流れていたものと思われる。

遺物は出土しなかった。

溝4・5・6（第41図）

検出長約1.2～2.6m、幅約20～30cm、深さ約2～3cmの小規模な溝群である。いずれも同一方向で、埋土が同じことから同時期の鋤溝と思われる。

各溝の埋土から土師器、須恵器、瓦器塊の細片が出土した。



第42図 89-3区 溝3
平面・断面図

溝7（第45図）

調査区の西部で検出された小規模な東西溝で、鋤溝の可能性が考えられる。検出長は約4.4m、幅約20～40cm、深さ約4cmを測る。

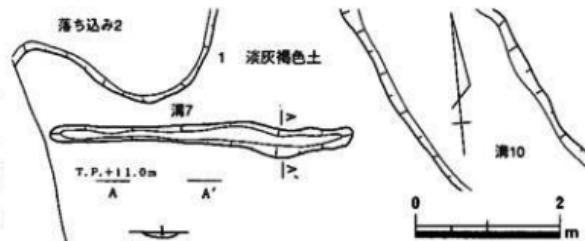
土師器が出土した。

溝8（第43・46図）

調査区中央のやや南よりに検出された南北溝で南部は土坑26、土坑28によって切られている。検出長約13.1m、幅約1.0～2.2m、深さ約10～20cmを測り、埋土は溝9と同じである。

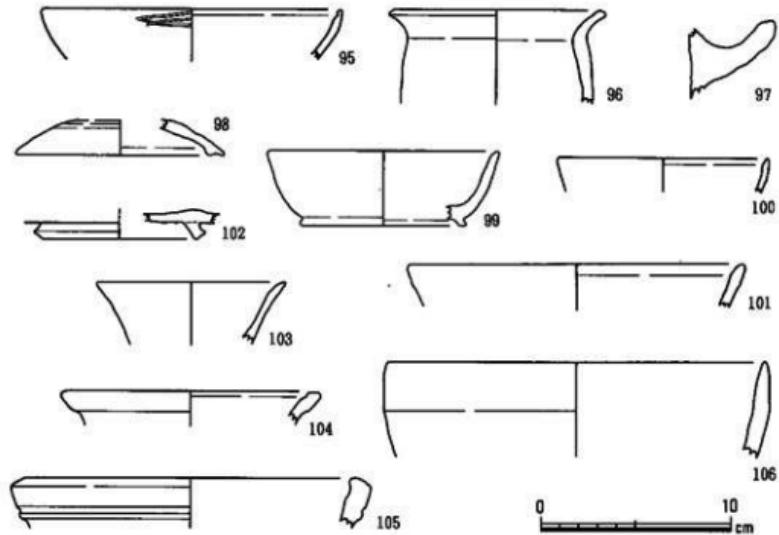
サスカイト剥片、土師器、須恵器が出土した。95～97は土師器で、95は壺、96は甕、97は鍋の把手である。98～106は須恵器で、98はかえりのある壺蓋、99～101は壺身、102は甕の底部と思われる。103～105は甕の口縁部、106は鉢の口縁部である。

溝9(第43・47図)
 溝8とほぼ平行に
 流れる溝で土坑27
 に切られている。
 檜出長約17.0m、幅
 約60cm~2.0m、深
 さ約20cmを測る。
 南端は削平されて
 いて詳細は不明だが浅く、幅広くなっている。

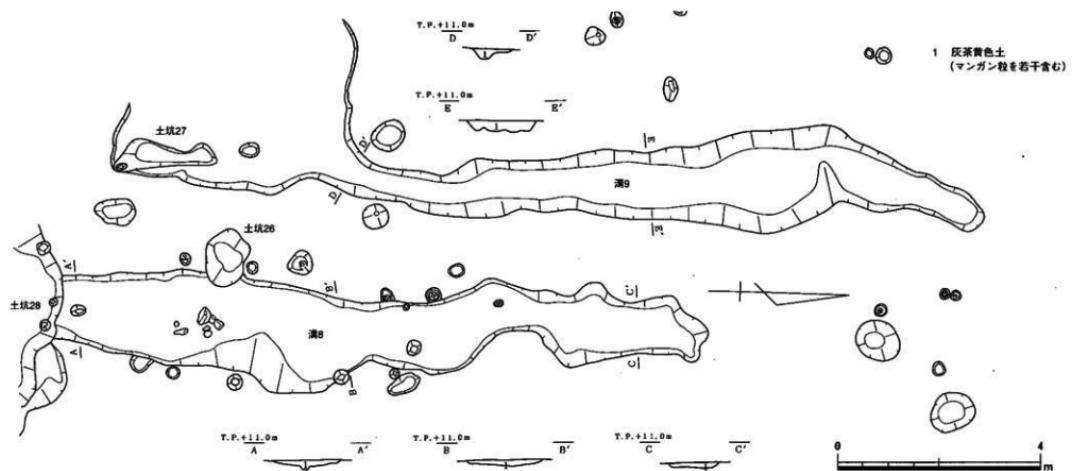


第45図 89-3区 溝7 平面・断面図

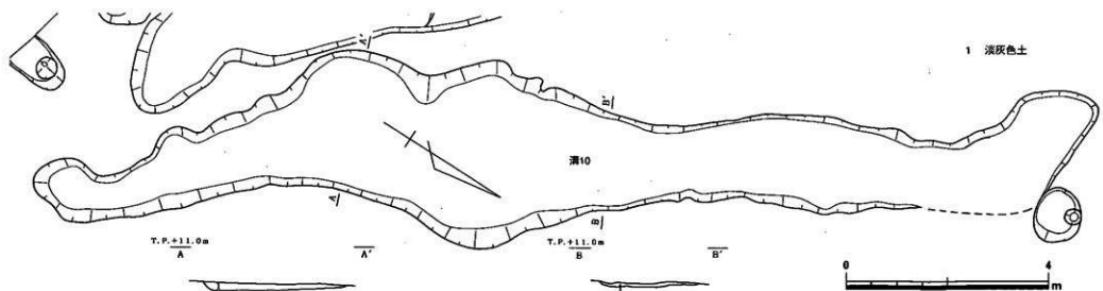
サヌカイト剥片、土師器、須恵器が出土しているが、図示できたものは須恵器のみである。107~111は壺蓋で、107から109はかえりのあるもの、110・111はかえりのないもの。112は壺身の口縁部である。113は無蓋高壺で、ほぼ完形品であった。114・115は壺の口縁部とおもわれる。その他に土師器の高壺脚部、須恵器の壺体部が出土した。中世以前のものと考えられる。



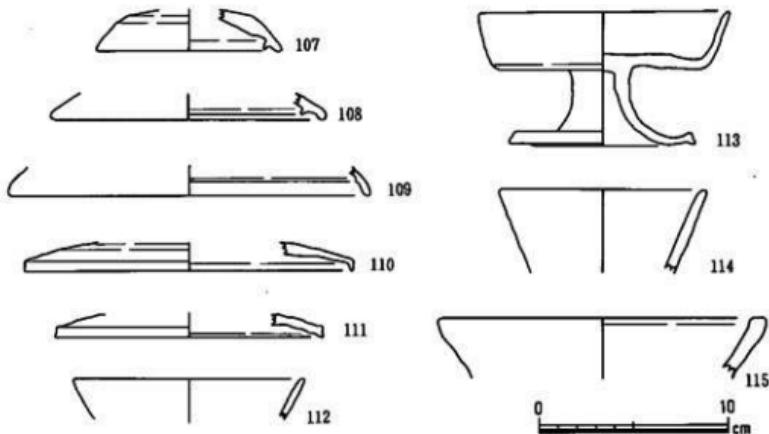
第46図 89-3区 溝8 出土遺物



第43図 89-3区 溝8・9 平面・断面図



第44図 89-3区 溝10 平面・断面図



第47図 89-3区 溝9 出土遺物

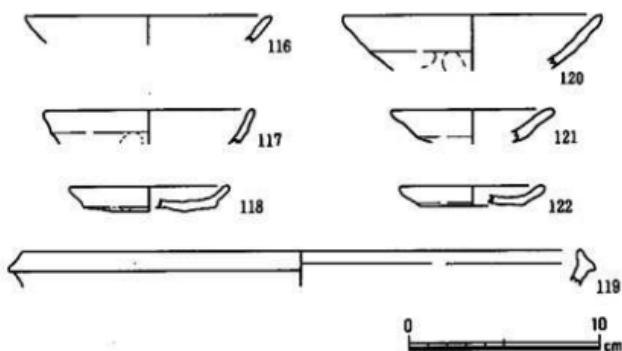
溝10（第44・48図）

調査区の南部に位置する中世の溝である。南東-北西方向で溝底は北高南低。検出長約21.0m、幅約90cm～約3.7m、深さ約15cmを測る。

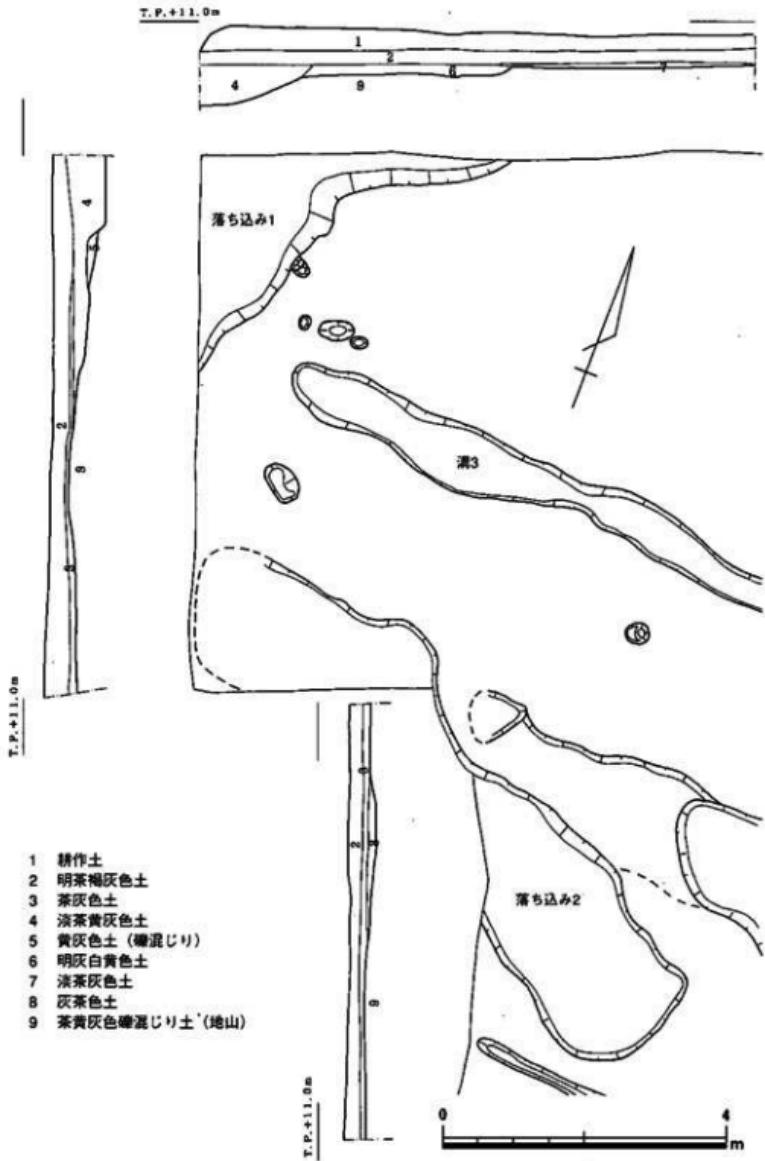
出土遺物は土師器、須恵器、黒色土器、瓦器である。116は内面に炭素を吸着させた、黒色土器A類の塊である。117～119は土師質土器で117は壺、118は小皿、119は鉢である。120は瓦器塊、121・122は瓦器小皿である。

落ち込み1（第49・50図）

調査区の西部に位置し、
東端の一画が
調査区にかかる
って検出され
た。最深部で
約60cmを測る。
出土遺物は
少ないが7世
紀前半のもの

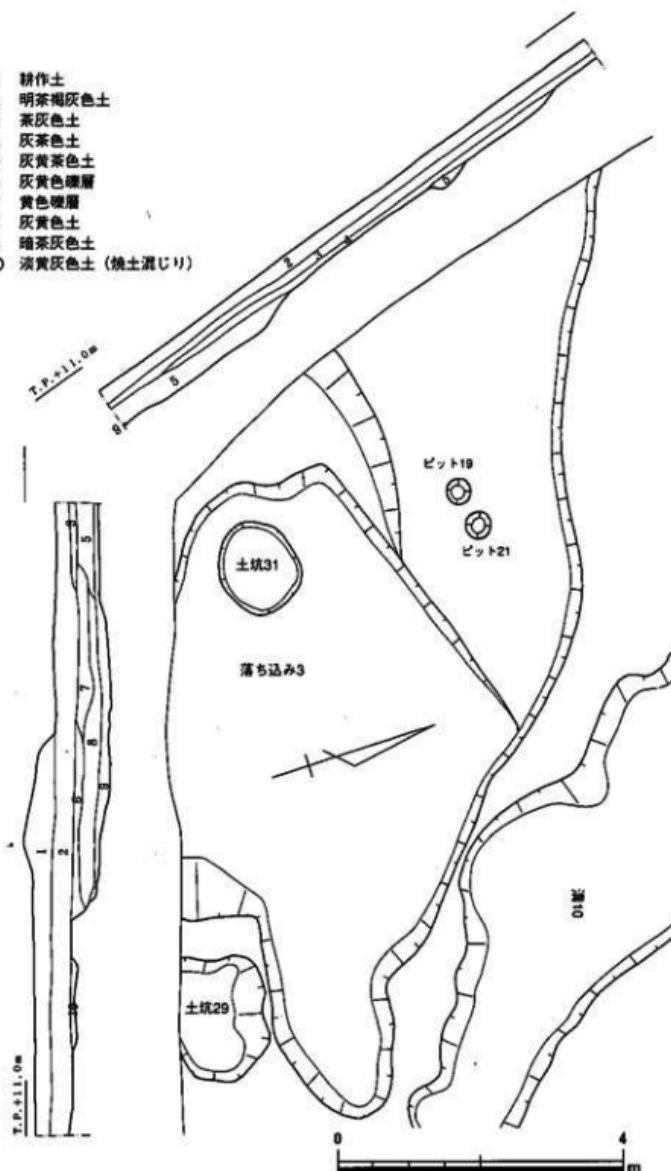


第48図 89-3区 溝10 出土遺物

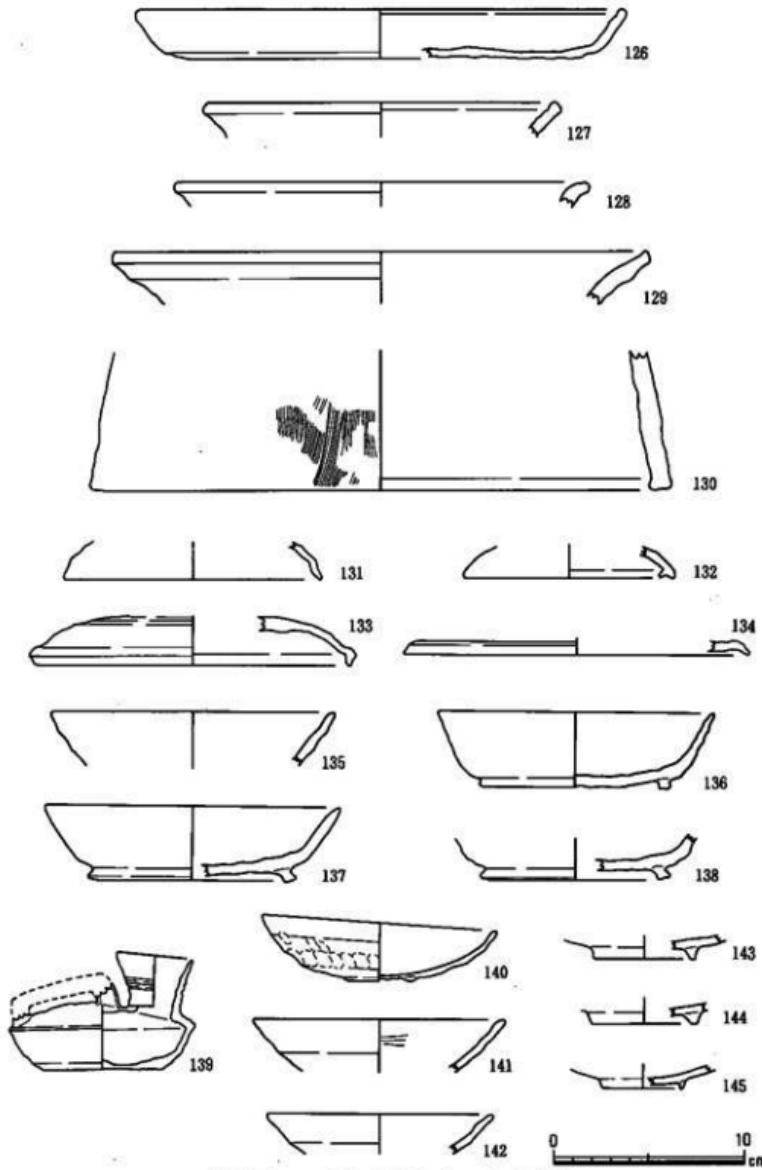


第49図 89-3区 落ち込み1・2 平面・断面図

- 1 耕作土
- 2 明茶褐色土
- 3 茶灰色土
- 4 灰茶色土
- 5 灰黄茶色土
- 6 灰黄色砾层
- 7 黄色砾层
- 8 灰黄色土
- 9 暗茶灰色土
- 10 淡黄灰色土 (燒土混じり)



第51図 89-3区 落ち込み3 平面・断面図



第52図 89-3区 落ち込み3 出土遺物

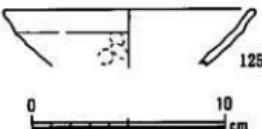
に限られる。123は須恵器の坏蓋で、他に須恵器の蓋
坏口縁部と土師器小片がみられた。



落ち込み2（第49・50図）

落ち込み1の南側に、一部のみ検出された。深さ
約10cmを測る非常に浅い落ち込みである。

出土遺物は図示できた124の須恵器の壺口縁部と125
の瓦器塊のみである。



0 10 cm

落ち込み3（第51・52図）

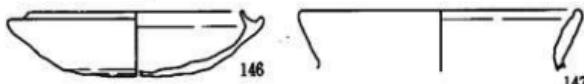
調査区の南西角に位置し、最深部で約50cmを測るが、
調査区外でさらに南西部に落ち込むと思われる。地山面まで掘削して、土坑31とピット
21・22が検出した。

遺物は他の造構に比べて、完型品に近いものが多い。土師器、須恵器は7・8世紀
と中世のものが大部分を占めるが、サスカイトの剥片も出土している。126～130は土
師器で126は皿、127～129は壺の口縁部、130は竈である。131～139は須恵器で、131
～134は坏蓋、135～138は坏身、139は平瓶である。140～145は瓦器塊である。

第50図 89-3区
落ち込み1・2 出土遺物

ピット群（第13・53図）

調査区内で多くのピットを検出したが、建物1・2以外は建物と断定できない。
ほとんどのピットから土師器小片が出土している。その内、図示できるものが出土
したのは次のピットである。146はピット12の須恵器の坏身、147はピット13の土師器
の壺口縁部、148はピット18の土師器の壺口縁部である。

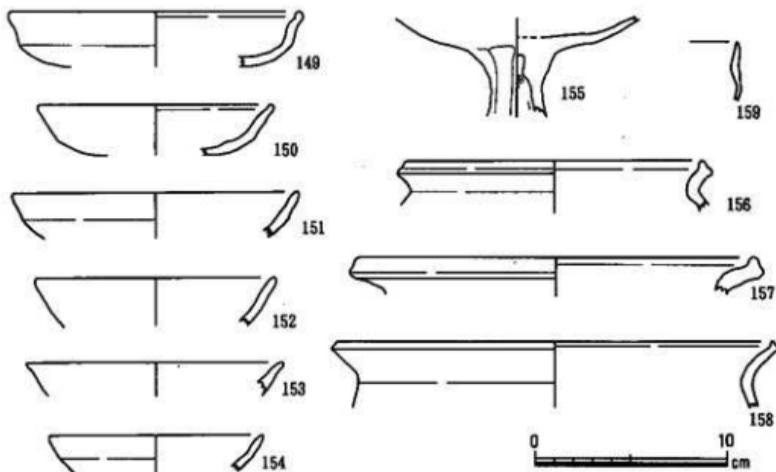


0 10 cm

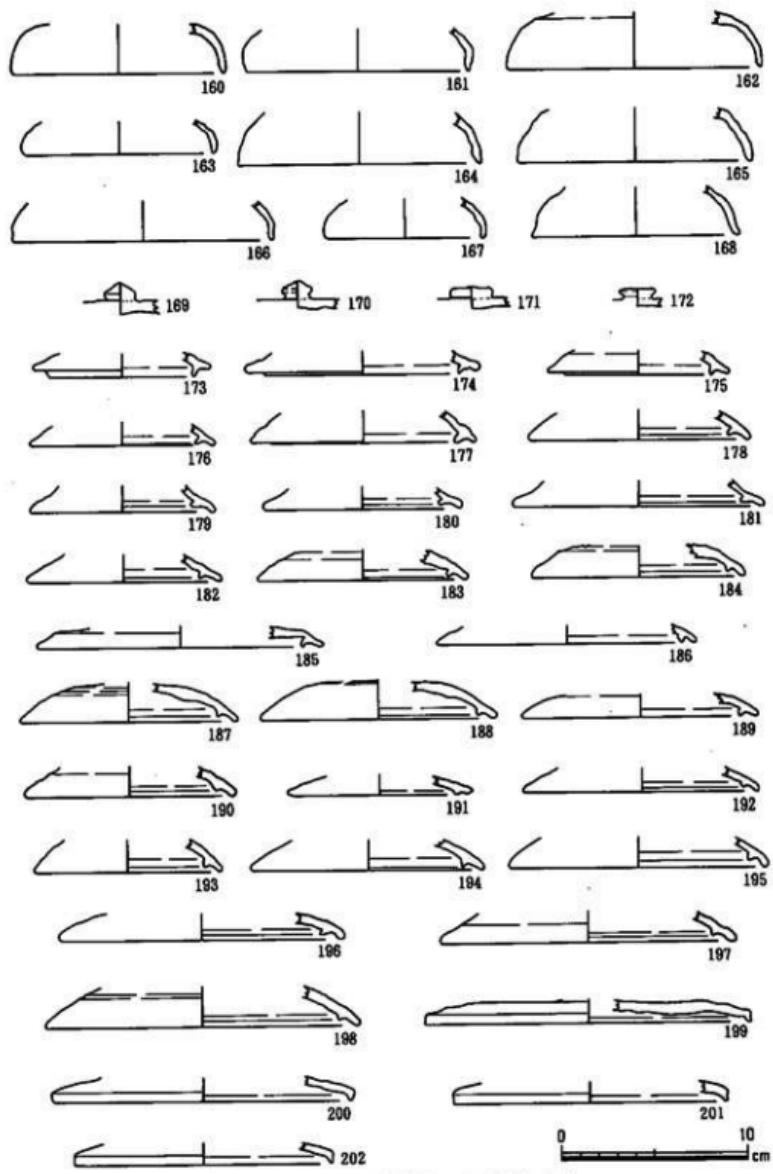
第53図 89-3区 ピット12・13・18 出土遺物

包含層出土遺物（第54～58図）

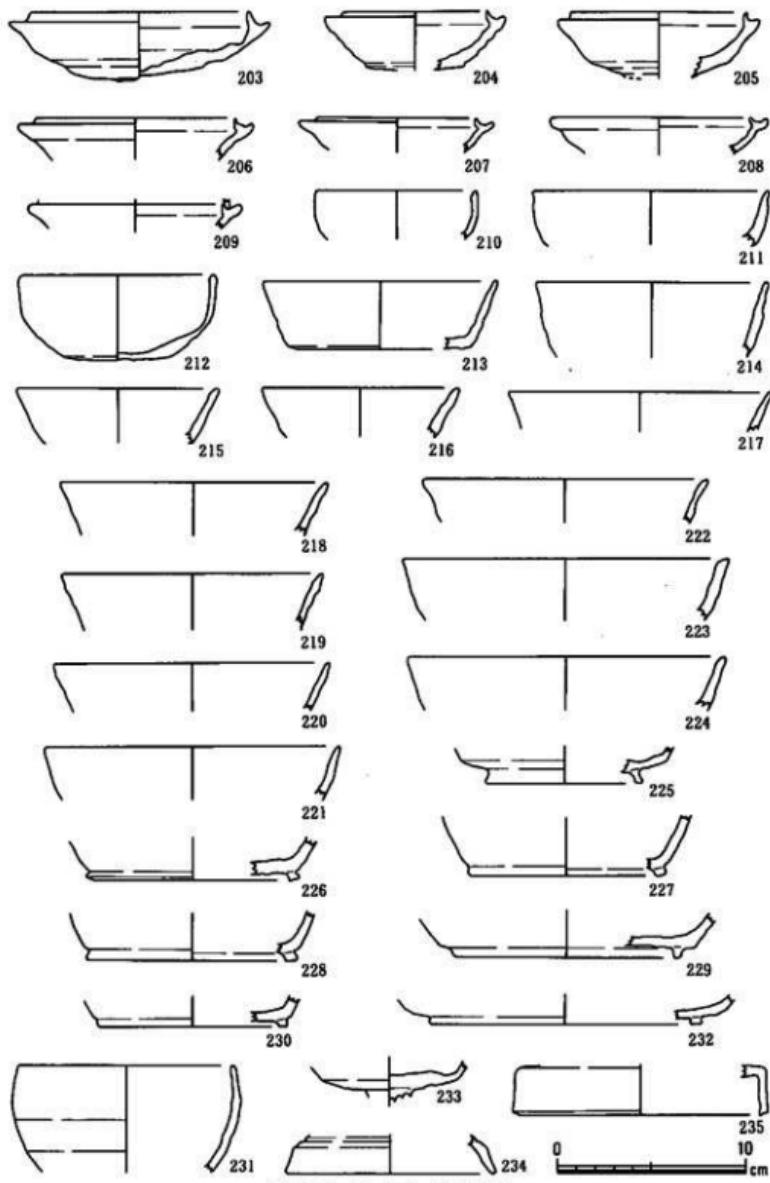
遺物の多くは、明茶褐色灰色土と茶灰色土から出土した。149～248は、奈良時代のものである。149～159は土師器で、149～154は壺、155は高壺、156～158は壺の口頸部、159は製塙土器である。160～247は須恵器で、160～202は壺蓋、203～230は壺身、231は壺、232は皿、233・234は高壺、235は薬壺の蓋、236は短頸壺、237～240は壺、241・242は鉄鉢、243・244は捏鉢、245は壺、246・247は飯蛸壺、248は須恵質の丸瓦である。249～255は平安時代のもので、249は綠釉壺、250は黒色土器A類の壺、251～255は須恵質の捏鉢である。256～287は中世のものである。256～264は土師質で、256～259は小皿、260・261は有孔土錘、262は管状土錘、263・264は蛸壺、265～283は瓦器で、265～277は壺、278～283は小皿である。284～287は青磁碗である。



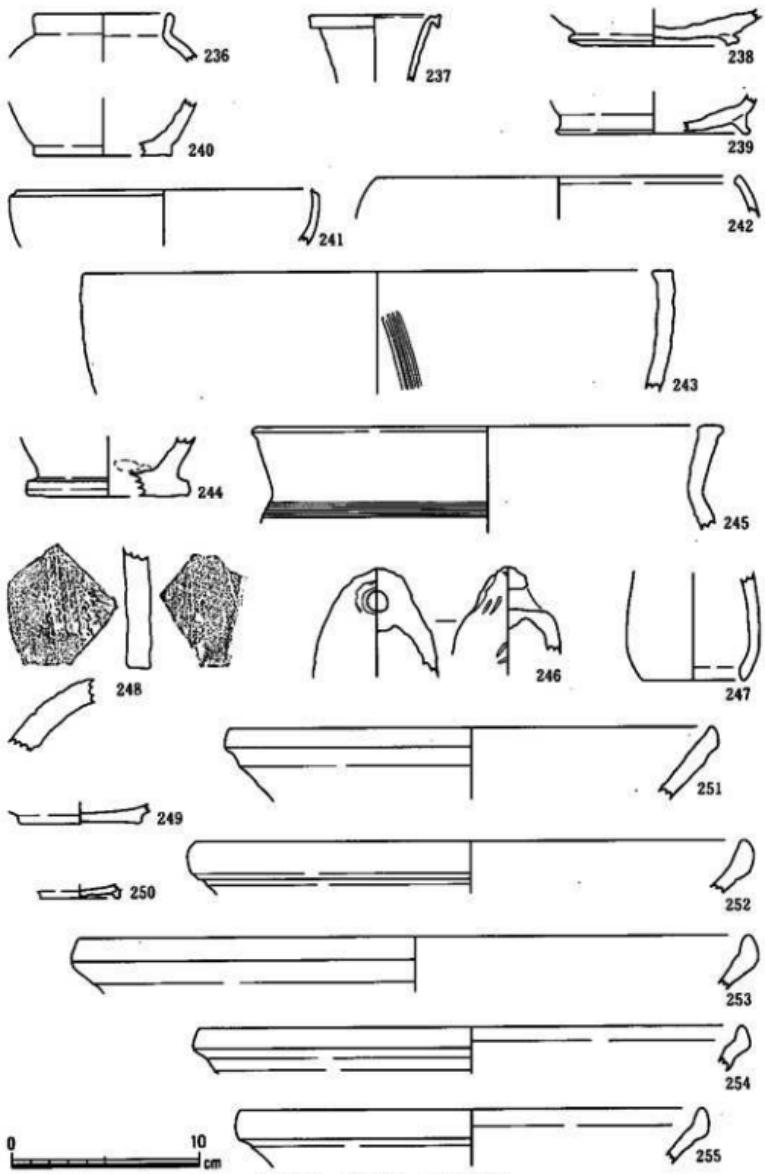
第54図 89-3区 包含層 出土遺物 (1)



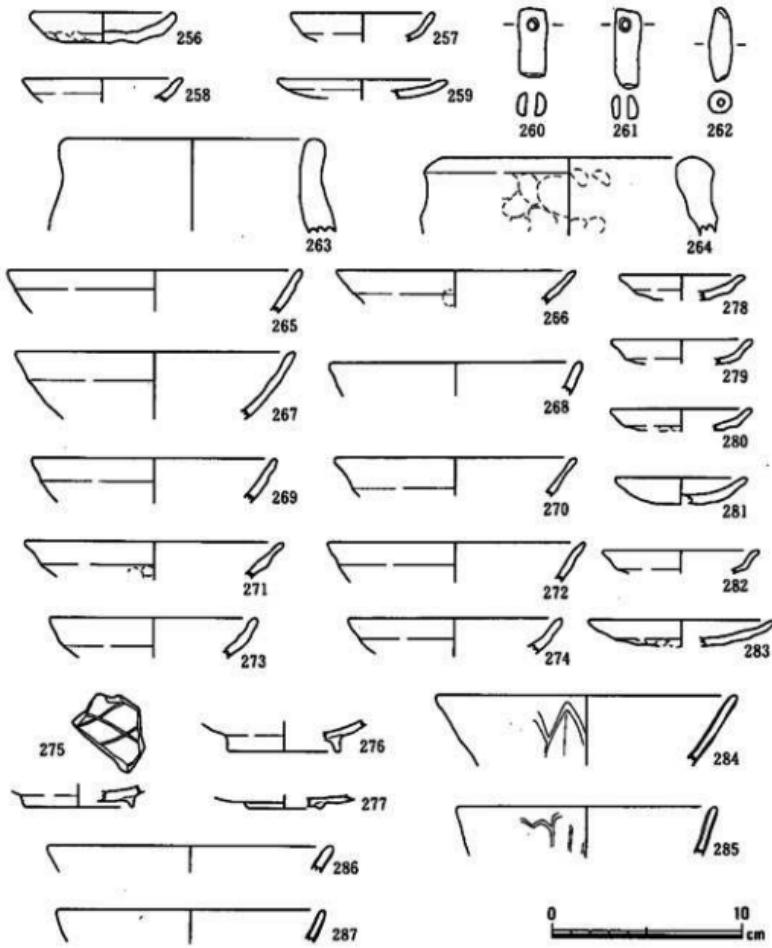
第55図 89-3区 包含層 出土遺物 (2)



第56図 89-3区 出土遺物



第57図 89-3区 出土遺物



第58図 89-3区 出土遺物 (3)

第3章 まとめ

以上3件の調査報告を行った。すべての調査区が駿河坊川と花折川に挟まれた段丘上に位置している。冒頭にも触れたように、以前から遺物の散布が確認されていたが、これらの調査により遺跡としての性格が少しは明らかになった。また、その範囲がしばられるようになったことが成果のひとつとしてあげられよう。しかし繰り返しになるが、86-1区の調査で破壊行為があり、貴重な遺構、遺物が失われたことは非常に遺憾なことである。

さて、今回の調査成果から、この貝掛遺跡の性格について若干触れたい。時代については、遺構から判断すると、概ね三時期に分かれるものと思われる。この他、遺物では縄文時代と考えられる石鎚などが出土していることから、さらに一時期増えることも想定される。すなわち、古墳時代後期、奈良時代、中世期の三時期である。古墳時代後期については、89-3区で土坑が確認されている。また、この時期の遺物は86-1区、89-2区でも出土しており、この土坑以外にも遺構の存在する可能性が高い。奈良時代については、89-3区で検出された建物3棟の他、奈良三彩が出土した土坑をはじめいくつかの溝が確認されている。中世期では86-1区、89-3区で溝が、89-2区で流路が検出されている。この時期の建物跡等は確認されていない。

このように今回の調査において、この貝掛遺跡では、縄文時代は別にして、奈良時代以前の古墳時代後期頃には生活の根柢が認められ、奈良時代には、奈良三彩が出土していることから、何らかの公的な施設が存在していたと想定される。その後、中世期には直接的な生活跡の痕跡は認められていない。近世期のこの付近の絵図には、建物などは存在せず、この中世期頃に耕地化されるものと思われる。

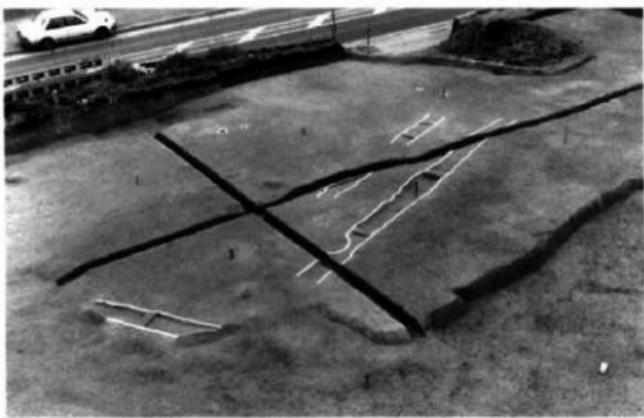
以上、本報告書でのまとめを簡潔に記述した。最後に、調査中の遺跡破壊という考えられない事態を引き起こしたことは、教育委員会側にも責任の一端があったことを認識して今後の調査にあたることが必要であるという決意を述べて締めくくりたい。

報告書抄録

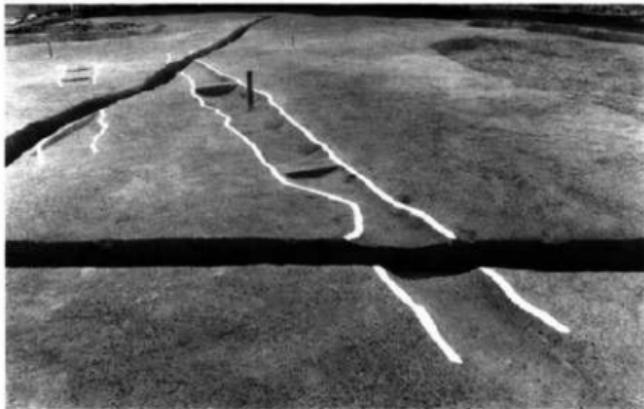
ふりがな	かいかけいせき						
書名	貝掛遺跡II						
副書名	86-1, 89-2・3区						
卷次							
シリーズ名	阪南市埋蔵文化財報告						
シリーズ番号	24						
編著者名	三好義三・田中早苗・上野仁						
編集機関	阪南市教育委員会社会教育課						
所在地	599-0292 大阪府阪南市尾崎町35-1				TEL 0724-71-5678		
発行年月日	1998年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 。	調査期間	面積 m ²	調査原因
かいかけいせき 貝掛遺跡	おおさかねんなんじ 大阪府阪南市	27232	19	342035	1351336	870309~ 870403	530
	かいかけ 貝掛	27232	19	342037	1351341	900205~ 900310	294
	かいかけ 貝掛	27232	19	342034	1351334	900315~ 900831	1203

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
貝掛	集落・散布地	古墳後期～中世期	溝・ピット	サスカイト・須恵器・土師器・黒色土器 ・瓦器・陶器・埴輪	
同上	同上	同上	流路・落ち込み	須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・陶器	
同上	同上	同上	建物基・土坑・溝・ピット ・落ち込み	サスカイト・三彩陶器・須恵器・土師器 ・黒色土器・瓦器・土埴・埴輪	

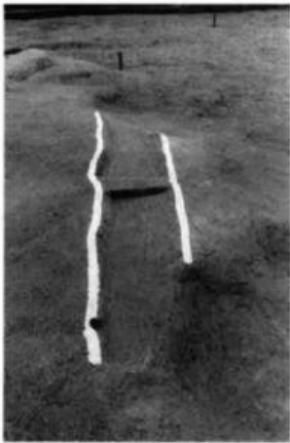
写 真 図 版



調査区中央部（南西より）



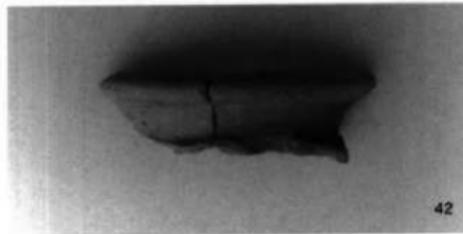
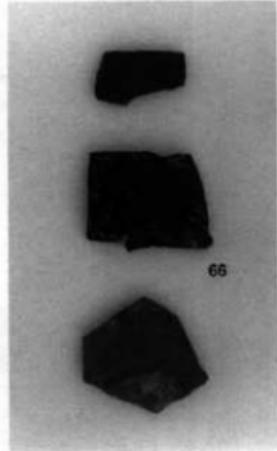
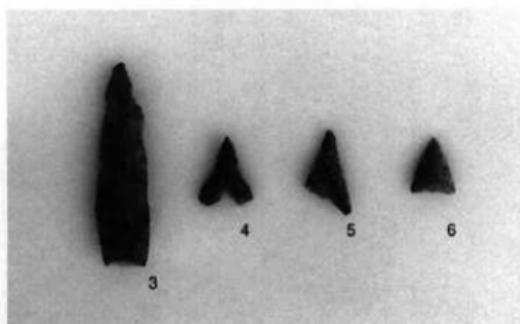
溝2・3（西より）

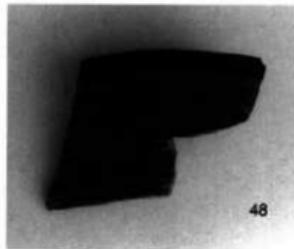
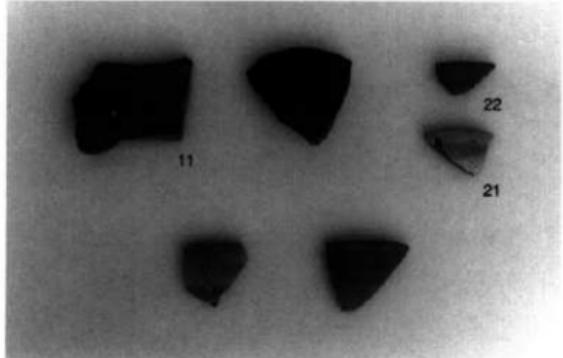
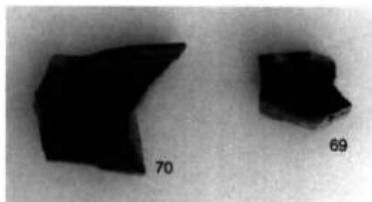
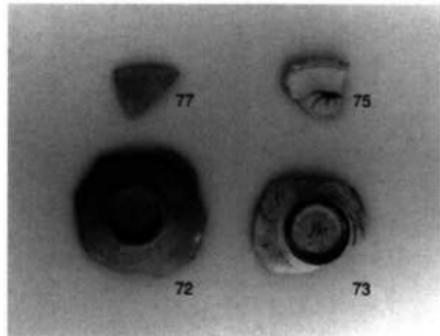
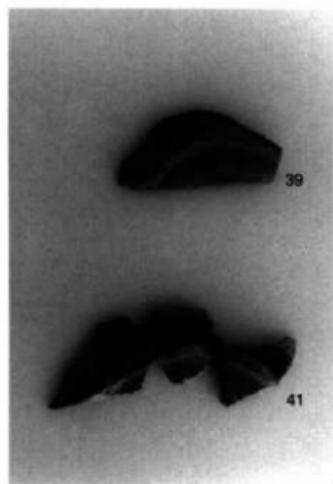
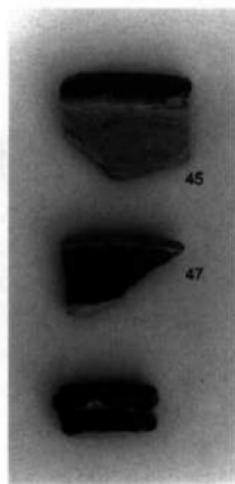
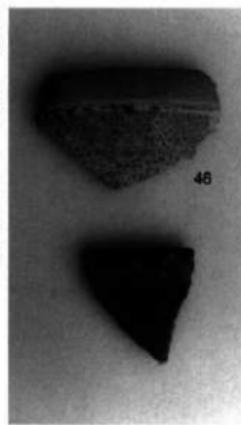


溝1（南東より）



溝1 北西断面



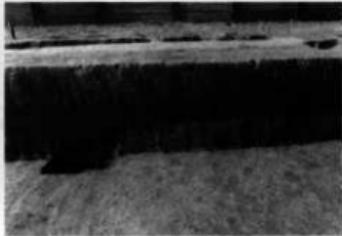




調査区全景（東より）



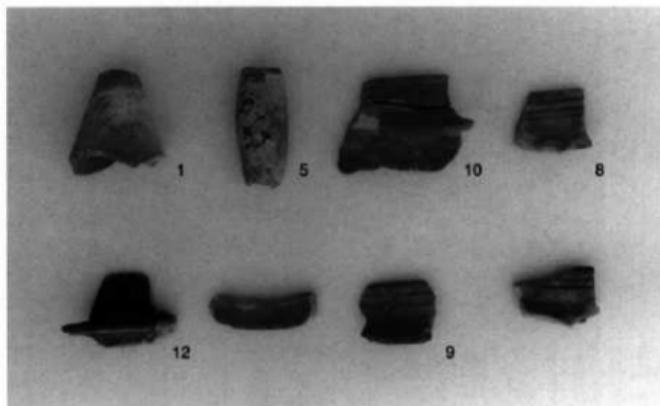
流路全景（南より）



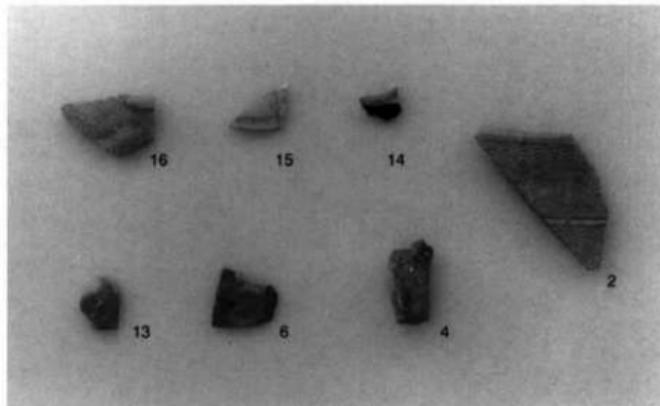
流路 北側断面



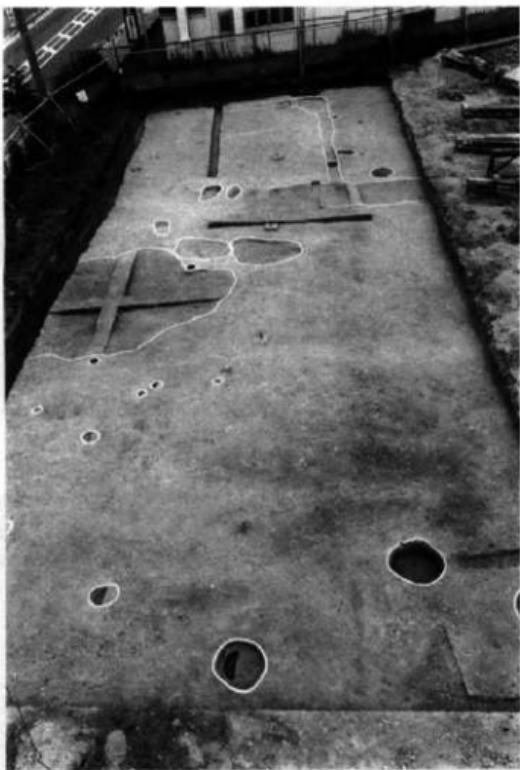
調査区より北西方面をのぞむ



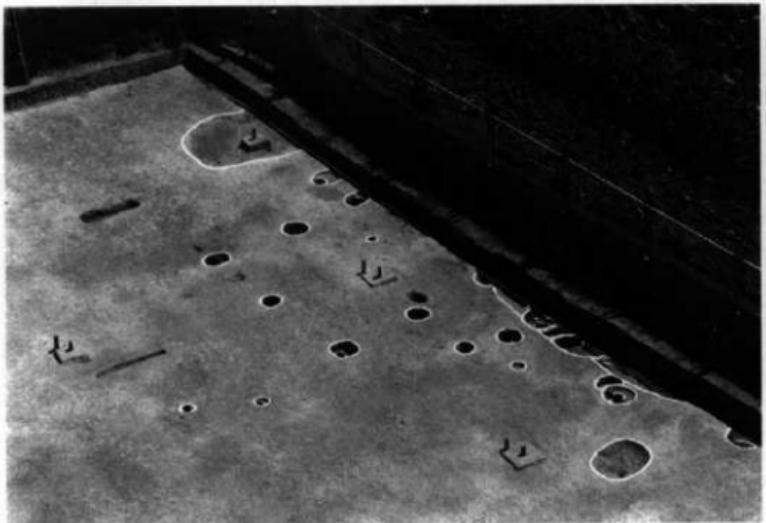
出土遺物



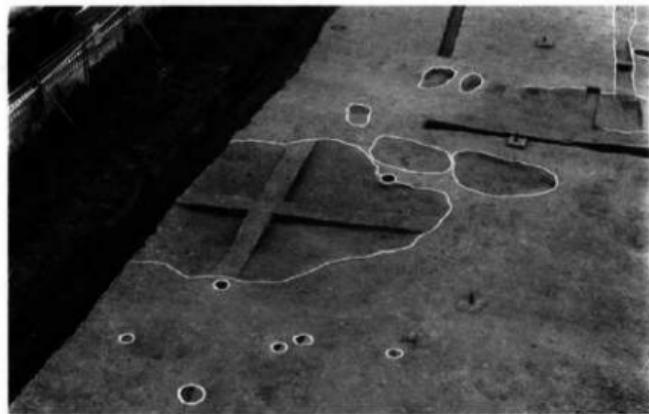
出土遺物



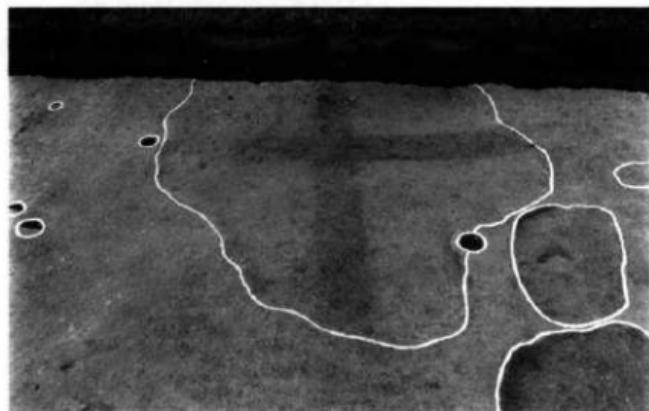
調査区北東部（西より）



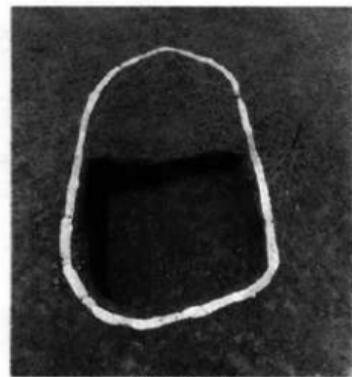
建物2（西より）



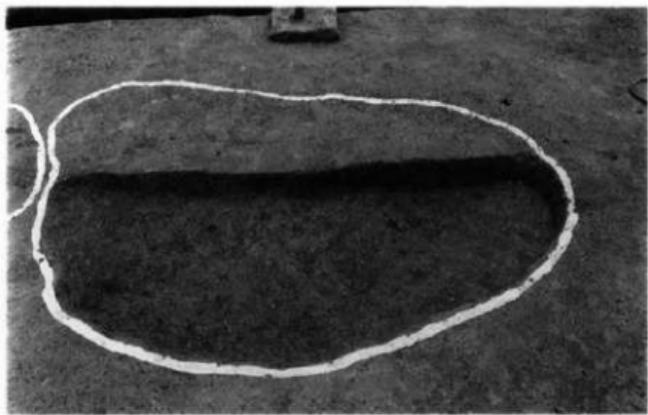
土坑1（西より）



土坑1（南より）



土坑3（東より）



土坑7（西より）



土坑15（北より）



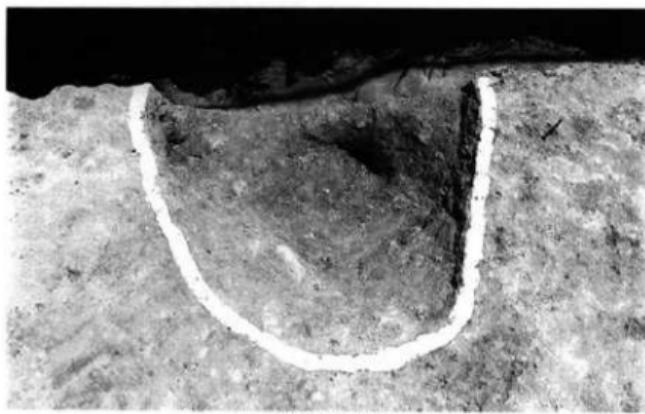
土坑16（南より）



土坑24（東より）



土坑29（北より）



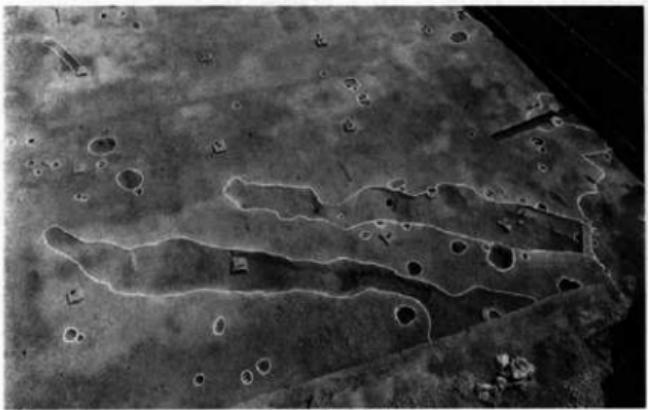
土坑30（北より）



溝1 (西より)



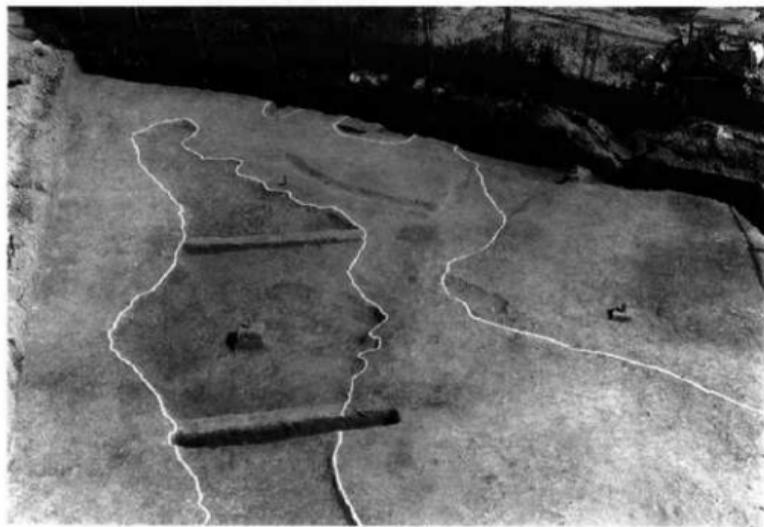
溝3 (南より)



溝8・9 (西より)



溝10（北より）



溝10（北より）



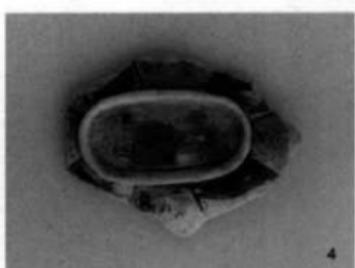
土坑1



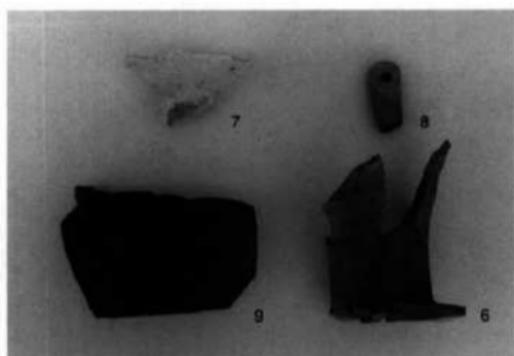
土坑1



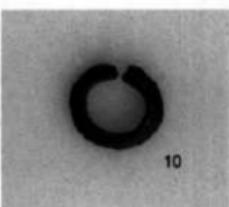
土坑1



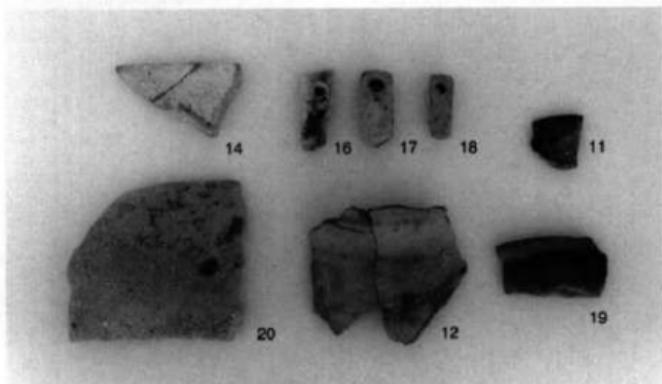
土坑1



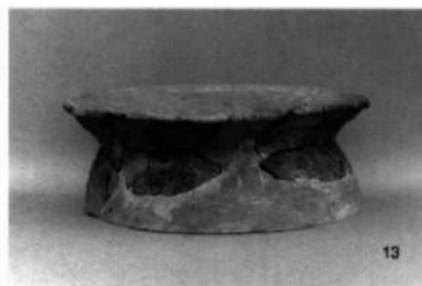
土坑4・11



土坑16



土坑16



13

土坑16



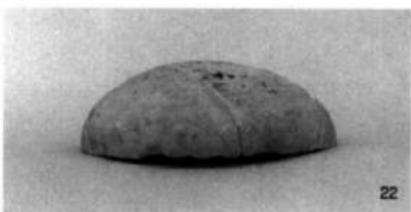
15

土坑16



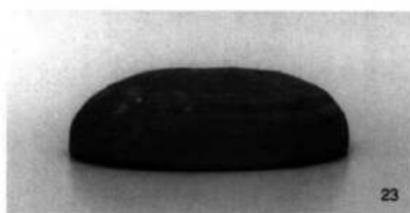
21

土坑16



22

土坑16



23

土坑16



24

土坑16



29

土坑16



30

土坑16



31

土坑16



32

土坑16



土坑16



土坑16



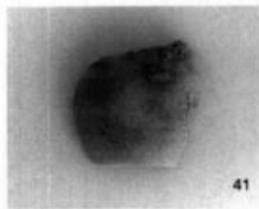
土坑16



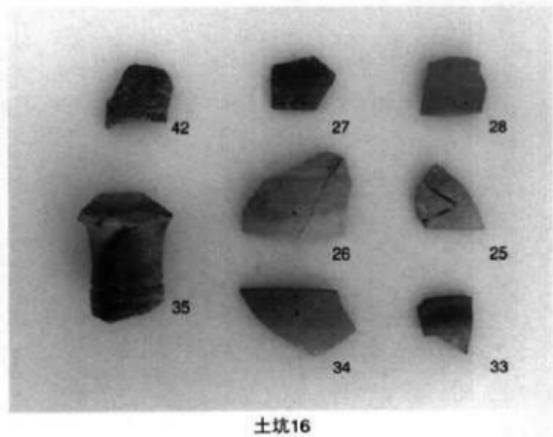
土坑16

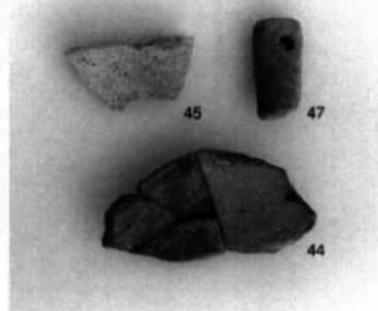


土坑16



土坑16

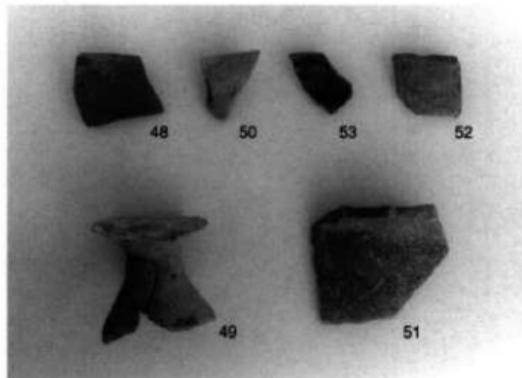




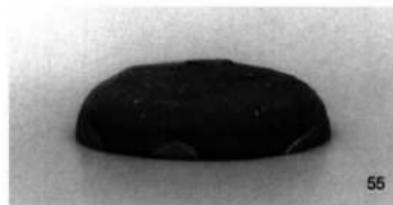
土坑19·20·25



土坑21



土坑28



土坑28



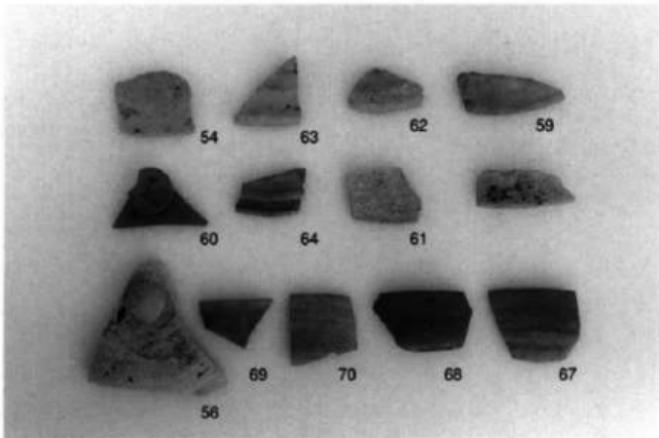
土坑28



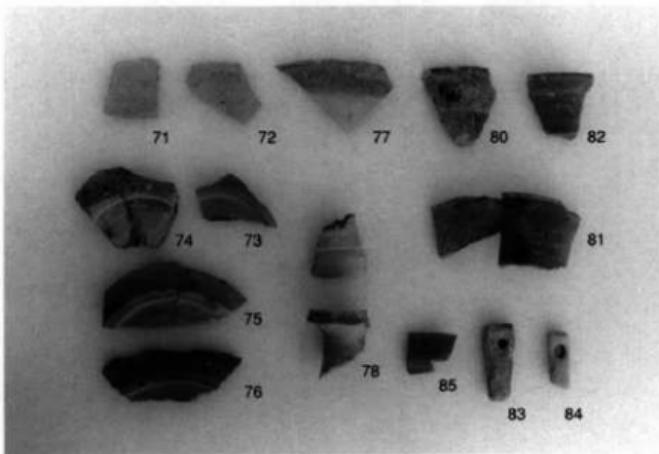
土坑28



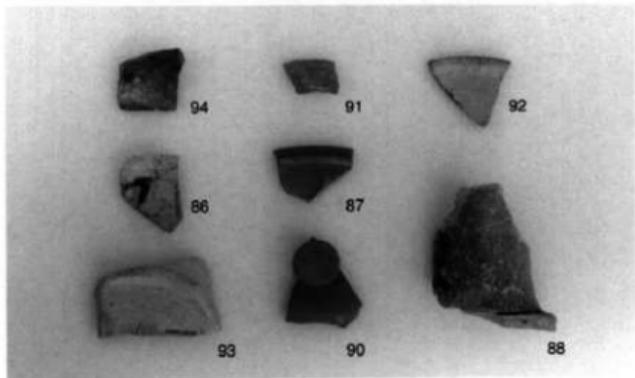
土坑28



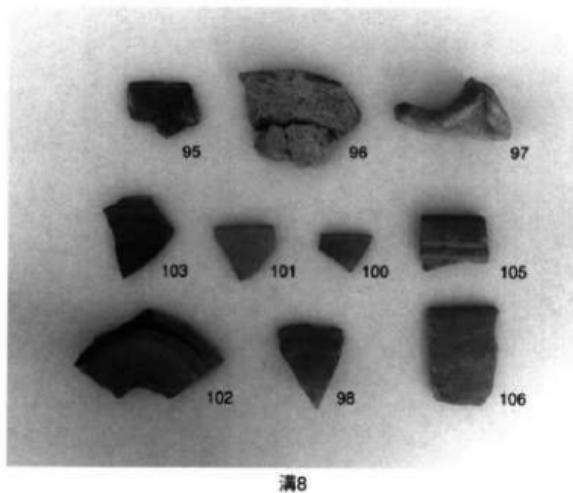
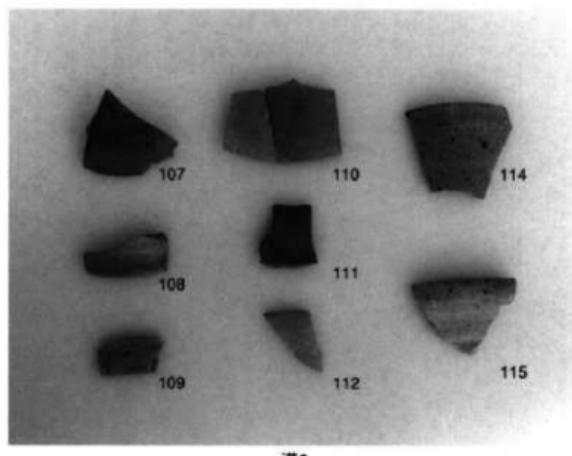
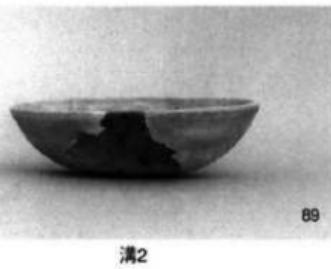
土坑28・30

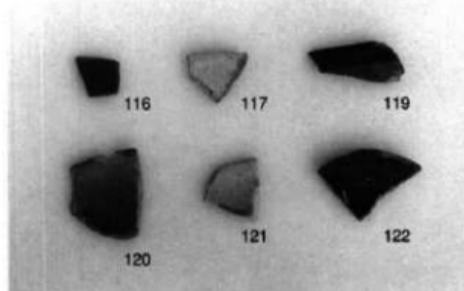


土坑28・30



溝1・2





満10



満10

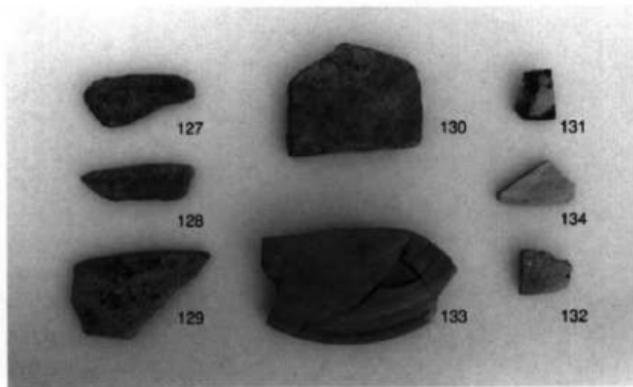


126



139

落ち込み3



落ち込み3



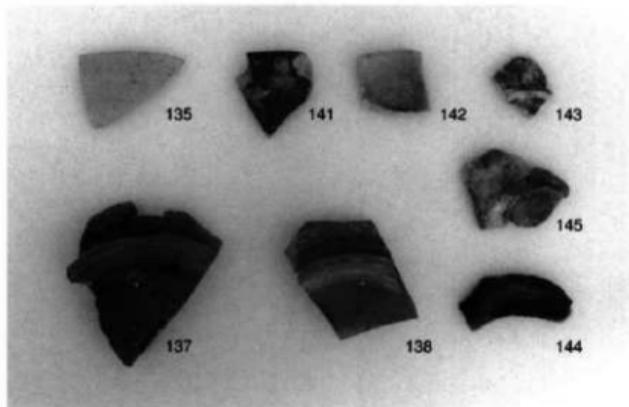
136

落ち込み3



140

落ち込み3



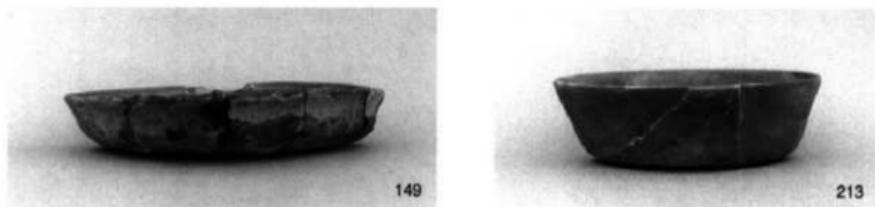
落ち込み3



ピット12

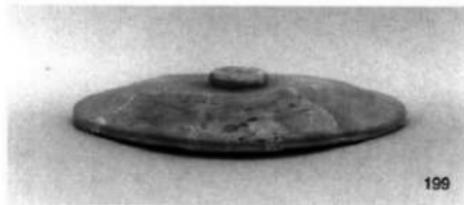
ピット13・18

落ち込み1・2



第2・3層

第2・3層



第2・3層

阪南市埋蔵文化財報告 XXIV

貝掛遺跡 II

—86-1, 89-2・3区—

1998年3月

発 行：阪南市教育委員会社会教育課
大阪府阪南市尾崎町35の1

印刷者：西岡総合印刷株式会社
和歌山市吹屋町5丁目54